2025 年度

JICA 九州　教師海外研修　報告書

研修国:ベトナム

目次

●研修概要

教師海外研修概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
海外研修　渡航先・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
研修参加者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
研修概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
研修を振り返っての感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82

●授業実践報告

福岡県　福岡市立福岡きぼう中学校　明石浩司・・・・・・・・・・・・・・・・・23
「持続可能な社会の実現のために　～ベトナムと JICA の国際協力を通して～」

福岡県　学校法人筑陽学園中学校・高等学校　林　愛恵・・・・・・・・・・・・30
「ベトナムを通じて多文化共生社会について考える」

佐賀県　佐賀大学教育学部付属小学校　小林　佳愛・・・・・・・・・・・・・・40
「世界から自分を見つめよう」

長崎県　長崎県立島原特別支援学校　小川　光洋・・・・・・・・・・・・・・・46
「踏み出そう、世界への第一歩」

熊本県　熊本県立熊本農業高等学校　鳥江　太介・・・・・・・・・・・・・・・53
「これからの社会と農業・農村」

宮崎県　小林市立南小学校　長﨑　雄史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
「ベトナムってどんな国？」

鹿児島県　鹿児島県立大島高等学校　岩川　奈稔子・・・・・・・・・・・・・・67
「Let’s think about our lives through the Vietnamese’s lives!」

鹿児島県　鹿児島市立吉田北中学校　松下　隼也・・・・・・・・・・・・・・・75
「地理的分野　第３章　日本の諸地域　１節　九州地方」

◆教師海外研修　研修概要

本研修は、教員の方々が実際に開発途上国を訪問することにより、開発途上国の現状や国際協力の現場、日本との関係に対する理解を深め、帰国後は訪問によって得た成果を授業実践を通して児童・生徒の教育に役立てていただくことを目的としています。参加教員には、研修参加後も育現場等で国際理解教育/開発教育の推進者として活躍することが期待されています。また、研修参加者同士の意見交換や知見の共通を通して、参加者同士や教員間の学びあい、ネットワーク形成を図ることも目的としています。

2025 年度　教師海外研修の流れ

2025 年 4 月　応募開始
↓
5 月　応募締切
↓
6 月　結果通知
↓
7 月　第 1、2 回事前研修
↓
8 月　第 3 回事前研修
↓
8 月 10 日～17 日　海外研修
↓
9 月　帰国後研修
↓
10 月～12 月　授業実践
↓
2026 年 1 月～2 月　学び合いネットワーク研修

海外研修　渡航先

ベトナム社会主義共和国

面積：32 万 9241 平方キロメートル
人口：約 1 億 30 万人
首都：ハノイ
民族：キン族（越人）約 86%、他に 53 の少数民族
言語：ベトナム語
宗教：仏教、カトリック、カオダイ教他
通貨：ドン（Dong）
主要産業：農林水産業（GDP に占める割合約 11.96%）、鉱工業・建築業（同約 37.12%）、
　　サービス業（同約 42.54%）
在留邦人数：18,949 人（2023 年 10 月現在）
在日ベトナム人数：600,348 人（2024 年 6 月現在）

出典：外務省ホームページ
　　ベトナム社会主義共和国（Socialist Republic of Viet Nam）基礎データ
　　(https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html#section1)

研修参加者及び同行者

福岡市立福岡きぼう中学校	明石 浩司
学校法人筑陽学園中学校・高等学校	林 愛恵
佐賀大学教育学部付属小学校	小林 佳愛
長崎県立島原特別支援学校	小川 光洋
熊本県立熊本農業高等学校	鳥江 太介
小林市立南小学校	長﨑 雄史
鹿児島県立大島高等学校	岩川 奈稔子
鹿児島市立吉田北中学校	松下 隼也
JICA 九州　市民参加協力課	橋口 恵利子
特定非営利活動法人　九州海外協力協会	宮原 良美

研修概要

2025 年 7 月 6 日（日）	第 1 回事前研修　@オンライン
7 月 27 日（日）	第 2 回事前研修　@JICA 九州＆オンライン
8 月 9 日（土）	第 3 回事前研修　@JICA 九州
8 月 10 日（日） ～ 8 月 17 日（日）	海外研修　@ベトナム
8 月 10 日（日）DAY1	福岡空港出発、ハノイ・ノイバイ空港到着
8 月 11 日（月）DAY2	・JICA ベトナム事務所(事業概要説明・ブリーフィング) ・日越大学視察 （JICA 技術協力プロジェクト「日越大学教育・研究・運営能力向上プロジェクト」）
8 月 12 日（火）DAY3	・Thanh Cong 中学校視察 ・ベトナムテレビジョン（VTV4）視察 （JICA 海外協力隊活動現場） ・歴史・文化理解（水上人形劇鑑賞）
8 月 13 日（水）DAY4	・ホアロー収容所訪問 ・書店訪問（教材購入） 移動（ハノイ→ダナン）
8 月 14 日（木）DAY5	・JICA 草の根技術協力事業① 視察 「クァンナム省山岳少数民族地域における地域資源を活用した持続的な農村産業促進のための基盤構築事業」／公益財団法人国際開発救援財団（FIDR）
8 月 15 日（金）DAY6	・JICA 草の根技術協力事業② 視察 「ベトナム国ダナン病院における新卒看護師臨床研修プログラム作成」／社会医療法人愛仁会 移動（ダナン→ホイアン） ・ホイアン旧市街視察
8 月 16 日（土）DAY7	・ホイアン旧市街視察 ・ベトナム研修振り返り 移動（ホイアン→ダナン） ダナン空港出発～福岡空港着（8 月 17 日）
9 月 28 日（日）	帰国後研修　@JICA 九州＆オンライン
10 月～12 月	授業実践
2026 年 1 月 31 日（土）～ 2 月 1 日（日）	学び合いネットワーク研修　@JICA 九州

◆第１回事前研修

〇日時　2025 年 7 月 6 日（日）　オンラインにて実施
〇内容　・自己紹介
・JICA の事業説明/教師海外研修の趣旨・目的の確認
・ベトナムについて
・研修スケジュール及び各訪問先についての説明
・ベトナム渡航や滞在における留意事項
・安全対策
・学校現場における国際理解教育/開発教育について
（飯塚市立穂波東中学校 校長 猿渡和則氏）
・JICA 海外協力隊員によるベトナム現地事情（JICA 海外協力隊 鈴木穂乃花氏）

〇感想

第１回事前研修はオンラインで実施され、教師海外研修に参加する教員と初めて顔を合わせる機会となった。一人一人の自己紹介を聞きながら、研修に対する意識の高さと自分との差に不安を感じながらも、この参加教員の皆と一緒なら自分自身を高められることは間違いないという確信へと変わっていった。

JICA 九州の井上建市民参加協力課長、特定非営利活動法人九州海外協力協会（以下、NPO 九州）の宮原氏による、JICA 事業説明、教師海外研修の趣旨・目的、並びにベトナム研修の全体的な内容について聞いた後、ベトナムで活動中の JICA 海外協力隊・鈴木穂乃花氏による現地事情を伺いながら、いよいよ自分がベトナム研修に行くのだという現実を少しずつ自覚していく時間となった。

猿渡氏による、自らの JICA 海外協力隊経験に基づいた学校現場における国際理解教育/開発教育の実践については、後に自分自身にずっと問いかけることになるわけだが、この教師海外研修を経て「自分に何ができるのか？」ということを考えることとなった。

第１回事前研修を経て、オンラインであったが研修を共にする仲間を知ることで安心感が生まれ、第２回以降に期待が膨らむ有意義な事前研修となった。（小川）

◆第 2 回事前研修

〇日時　2025 年 7 月 27 日（日）JICA 九州センター及びオンラインにて実施
〇内容　・課題発表（①参加教員が研修目的を達成するための取組み②身の回りのベトナム探し）
・昨年度教師海外研修参加教員の体験談
（熊本市立田迎西小学校　赤池　美里氏）
・授業実践講座：写真を用いた国際理解教育/開発教育の実践
（JICA 地球ひろば　佐藤　秀樹氏）
・意見交換（役割分担、現地校訪問時の出し物など）

〇感想

第 1 回事前研修からの課題であった「身の回りのベトナム」について、参加教員が調べたことを発表した。日本で働く技能実習生、バインミーやベトナムコーヒー等のお店、ディズニー映画の「ラーヤと龍の王国」、ベトナム産のユニクロの製品、ベトナムの絵本、日本の焼酎に似たネプモイなど、各参加教員の題材は大変興味深く、ベトナムへの関心が更に高まっている様子がうかがえた。また、ベトナム研修目的達成に向けた取組みの発表では、改めて、参加教員の教師海外研修に対する抱負や、「身の回りのベトナム」を調べたことで更に具体的になった授業のイメージを共有して、ベトナム研修後の授業実践に向けて身が引き締まる思いがした。

昨年度、教師海外研修に参加された熊本市立田迎西小学校の赤池美里氏の活動体験談では、現地で見たもの、感じたことをどのように授業の実践に活かされたのかを具体的にお話いただいた。授業実践の具体的なイメージやヒントを多くいただくと共に、現地の研修で「自分の心が動いた瞬間」を授業の題材に活かしていきたいと感じた。また、JICA 地球ひろばの佐藤秀樹氏からは国際理解教育/開発教育の意義や、同教育における写真の活かし方についてお話をいただいた。何が授業の題材として使えるか、意外とその場で気づけないこともある為、自分が感じた小さな違和感や驚きを大切に写真に収めていきたいと感じた。

参加教員の様々な視点や授業実践における具体的な手法を学ぶことができ、視野を広げる有意義な研修となった。（林）

◆第 3 回事前研修

〇日時　2025 年 8 月 9 日（土）JICA 九州センターにて実施
〇内容　・チームビルディング：参加教員同士の関係性を強化する
・課題発表：「研修目標達成のために、ベトナム研修を具体的にどのように使いたいか」について
・参加型ワークショップ：「豊かな社会にとって大切なこと」
（講師：認定 NPO 法人開発教育協会(DEAR)　中村絵乃氏）
・ベトナム研修に向けての情報・確認事項の共有

〇感想

今回の第 3 回事前研修を通して、私は「支援とは何か」「発展とは誰のためのものか」という問いを強く意識するようになった。さらに、ベトナムの発展を「経済」だけでなく、「教育」という観点から捉えることの重要性を学んだ。これまでベトナムについて、急速な経済成長や日本企業の進出といった側面を中心に捉えていたが、その背景には人材育成や教育制度への継続的な取組みがあることを知った。

全３回の事前研修を通して、日本の ODA や JICA の取組みは、インフラ整備だけでなく、人材育成や教育、制度づくりなどの目に見えない部分を支えてきたことがわかった。中でも、学校教育や職業教育など「人を育てる支援」が重視されていることが印象に残った。特に、単に知識や技術を教えるのではなく、現地の教育制度や文化を重視しながら、現地の人々を主体とした学びの継続を目指している点から、共に考え、共に進む関係が大切にされていると感じた。教育を通して将来の社会を担う人材を育てることが、結果的に持続可能な発展につながっていくという考え方に納得した。

また、ベトナム国内における地域差や教育環境、労働環境の違いについても考える機会があり、教育の機会が将来の進路や生活の質に大きく影響することを改めて実感した。発展のスピードが速いからこそ、環境問題や都市集中といった新たな課題も生まれており、経済成長だけでは測れない「豊かさ」についても考える契機となった。キャリア教育の重要性はベトナムに限らず日本にも共通する課題であり、他国の事例として学ぶ意義を強く感じた。現地を訪れる前から「何を見るべきか」「どのような視点で話を聞くべきか」が明確になった。特に、教育が個人の人生だけでなく、社会全体の発展を支える基盤であることを意識してベトナム研修に臨みたいと考えた。ベトナムの教育現場や人々の声に直接触れることで、教育の持つ力や可能性について、さらに理解を深めていきたい。(小林)

◆海外研修１日目　2025 年 8 月 11 日(月)

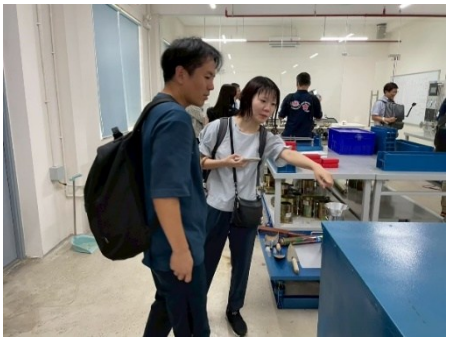
JICA ベトナム事務所、日越大学訪問

〇JICA ベトナム事務所

【ベトナムでの取り組み】

研修１日目。最初の訪問先となったのが JICA ベトナム事務所だった。三菱や JCB など馴染みのある日系企業もたくさんはいっていたビルの中に事務所はあった。到着すると JICA ベトナム事務所の所長や担当職員の方々から、JICA についての概要説明やベトナムの安全対策、JICA ベトナムのこれまでの ODA やなどの取り組みについてお話をいただいた。例えば「ノイバイ空港」や「ニャッタン橋」など、日本からの ODA(円借款)がどの規模で行われているのかなど、具体的な取り組みについて教えていただいた。その話の中で、「ただただお金を貸すだけではない。どのように使い、どのように設計するのか？その技術や使い方まで関わることが重要である」と所長の強い言葉に思いを感じた。また「この協力がベトナムではなく、日本の経済にも役立つという視点も感じてほしい」という言葉からも、「人を通じた協力」の重要さも感じることができた。また、所員の中丸さんからは国際協力において「インパクト」をもたらすことの大切さや中所得国の罠の回避など、ベトナムの課題についてより詳しく知ることができた。その中でも、教育における「インパクト」の一つとして、午後から見学する「日越大学」の存在があり、ベトナムの課題でもある高度な技術を持った人材の育成に貢献している。

〇日越大学訪問



日越大学(VJU)は、ベトナムにハノイ校とホーチミン校がある。2015 年より JICA の技術協力による支援が行われており、現在は 2029 年の新設のキャンパスのため、大規模な工事がすすめられている。この建設にも JICA の ODA(円借款)が活用されている。大学の理念として、「リベラルや技術を取り入れている革新的な大学」「国づくりを担う高度人材育成」「日本企業への人材供給／研究拠点の提供」などがあり、「Sakura Science Program at VJU」のプログラム等日本の大学や地方公共団体との積極的な連携協力が行われている。現在、約 1,200 名の学生が在籍している。(修士・学士課程、留学生も含む)VJU で教壇に立たれている藤野先生とお話した際に、「ベトナムの教育は、日本の教育と比べるとやはり遅れているという事実はある。例えばアクティブラーニングなども少しずつベトナムでも広がっている。ただ一つだけ言えるのは、ベトナム人は新しいことを取り入れらその順応が高い。学びに向かう姿勢が素晴らしい。だからこそ発展するベトナムが広がっているのかもしれない。」とおっしゃっていた。ベトナムの教育の今の１面を感じることができた。(松下)

◆海外研修 2 日目　2025 年 8 月 12 日（火）

Thanh Cong 中学校、VTV4（ベトナムテレビジョン）訪問、歴史・文化理解（水上人形劇）

〇Thanh Cong 中学校

Thanh Cong 中学校に到着するなり学校をあげた熱烈な歓迎に猛烈に感動することとなった。校内を案内されるままに見渡していくと、女性の先生の多さに気付いた。女性の社会進出が進んでいるものと思い、そのことについて尋ねると、むしろその逆で男性は「責任が重く、強さを求められる仕事」、女性は「繊細できめ細やかさを求められる仕事」という考え方が未だに残っているとのことであった。

授業の様子を見学すると、規律は重んじられているものの、生徒たちが笑顔で楽しそうに授業に参加している様子が印象的であった。生徒たちとの交流の中で、事前に準備しておいた折り紙で「蓮の花」を折ったりしたが、伝えたいことを伝えることの難しさ、そして伝わった時の喜びを改めて実感する時間となった。

校内では時折、社会主義を感じさせられる場面もあった。トップダウン方式で物事が決まるからこそ、様々なことに対して対応がスピーディであるようである。また一方で、自分たちが生まれた国を愛する心や先祖や家族を大切にする心が、育まれている様子を感じた。

〇VTV4（ベトナムテレビジョン）

まずは VTV4 内の施設を見学した。日本からの ODA によって施設の建設や番組制作の技術向上などの支援が行われており、日本とベトナムの友好関係を示す象徴的なプロジェクトの一つである。

日本において、このようにテレビ局の施設を見学するといった機会はほとんどないため、実際に撮影セットや撮影機材、撮影の現場や番組制作の現場を見学させていただけたことは非常に貴重な経験となった。

施設見学後は、JICA 海外協力隊としてこのテレビ局に派遣されている津野允隊員に、実際の活動について話を聞いた。日本語番組の制作における内容・取材等に関する提案や改善、ニュース原稿の校正や原稿読みの日本語指導等を行なっているとのことであったが、津野隊員が「愛着のわく日本語」を意識しているという話が最も印象的であった。

おそらく自分と同年代であろう津野隊員が日本での将来を約束されたような人生でなく、縁もゆかりもない異国の地で、日々刺激を受けながら果敢に人生を送られている姿に大いに刺激を受けた。

〇歴史・文化理解（水上人形劇鑑賞）

水上人形劇は文字通り水上で物語を演じる人形劇で、ベトナムでは最も有名な伝統芸能である。当然初めての鑑賞であり、あえて予備知識も持たぬまま鑑賞に臨んだが、両側に陣取る演者の手元にある個性的な形状をした楽器とそこから発せられる音色に引き込まれていった。その音色に合わせて人形劇が始まるわけだが、一つ一つの人形の一糸乱れぬ動きと、動きのダイナミックさに心を奪われ、次第にどのようにして人形を動かしているのか非常に興味深かった。余談ではあるが、劇場に入場する前、劇場の周辺にいる物売りに気を付けるように聞かされていたが、「パンを１個どうだ？」と勧められ、「１個ぐらいなら」と思い、買おうとしたら、袋にどんどん詰められて、大した金額ではなかったが余分に買わされる羽目になり、海外らしい経験をすることとなってしまった。（小川）

◆海外研修 3 日目　2025 年 8 月 13 日（水）

ホアロー収容所、ホンハーセンター（書店）訪問

○トレインストリート

　トレインストリートは、ハノイ市内の狭い路地を列車が通過することで知られる観光地であり、朝から多くの観光客で賑わっていた。列車通過の時間帯ではなかったため実際の運行を見ることはできなかったが、線路上では住民が観光客向けに土産物を販売したり、ペットボトルの仕分けを行ったりしており、生活と観光が同一空間で共存する独自の市街地景観であった。

○ホアロー収容所

　ホアロー収容所は、1896 年に建設されたフランス植民地時代の歴史的施設であり、当時の収容者の生活を再現した模型や資料等が展示されていた。施設は町の中心部に位置し、隣接地には最高裁判所があった。過密収容、粗末な食事、公開処刑等、劣悪な収容環境が展示され、妊婦や子どもまでもが収容された過酷な状況に衝撃を受けた。ガイドさんは、一部の収容者は独立の志を持ったベトナム人収容者から思想教育を受け、後の革命運動に関わっていったと話された。また、ベトナム戦争の展示も併設されており、その展示からはアメリカ合衆国に勝利した国としての誇りを感じた。

○ホンハーセンター（書店）

　ホンハーセンターでは、ベトナムの教科書、地図、文具、ランドセル等、多様な商品が取り扱われており、日本の書店と遜色のない品揃えであった。店員さんは親切で、自身が愛用している万年筆を丁寧に紹介するなど誠実な応対が印象に残った。

○昼食（BUN CHA HUONG LIEN〔ブンチャー・オバマ〕）

　昼食は、2016 年にベトナム訪問中のバラク・オバマ米大統領が来店したことで知られるレストランを訪問し、ブンチャーを食した。ブンチャーは麺料理だが、レタス、パクチー、ノコギリコリアンダー、シソ、ミントの 5 種類の野菜が提供され、地域、季節、家庭によって種類や比率が変化すると知った。

〇ダナン空港への移動

夕方、ノイバイ国際空港からダナン空港へ移動した。着陸の際、一度やり直しがあり不安を覚えたが、無事に着陸した際には乗客から拍手が起こった。ダナン市は清潔で落ち着いた雰囲気があり、翌朝の早朝体操の風景も印象的であった。リゾート地として人気であるとのことで、その魅力が強く感じられた。

一日を通して、ベトナムの歴史的背景、文化的価値観および社会制度を多面的に学ぶことができた。特にホアロー収容所の見学は、同国の独立運動を理解するうえで不可欠な内容であり、困難に立ち向かい続けてきた人々の精神の強さを実感した。また、歴史的経験が、現在の柔軟な文化や国民性等を創り出していることが理解できた。ベトナム料理は新鮮な野菜が豊富に使われており、身体に優しく、見た目にも美しかった。主食である米は、米飯だけでなく麺やライスペーパーとして、様々な料理に利用されており、食文化を通して異文化理解を深める貴重な機会となった。（鳥江）

◆海外研修 4 日目　2025 年 8 月 14 日（木）

JICA 草の根技術協力事業 視察「クァンナム省山岳少数民族地域における地域資源を活用した持続可能な農村産業促進のための基盤構築事業」

〇クァンナム省山岳少数民族訪問

移動のバスの中で、FIDR（国際開発救援団体）の大槻さんから少数民族についての話を聞いた。一番心に残った言葉は資源を生かすことを「その地域の宝探し」と表現していたことだ。その地域でしかできないようなことを「宝探し」のようにして見つけ、観光の資源として活用しているとのこと。その土地に住む人にとっては当たり前のことであっても、他所から来る人にとっては経験しがたい事である可能性は十分にある。それを「宝探し」のように考えて広めていることはとても素敵なことだと感じた。これは、自分の住む宮崎県でも同じことが言えるだろうし、郷土愛を育む教育活動にも通ずるものがあると感じた。

＜ムオン族訪問＞

ムオン族の村では、「宝探し」の一つの結果として観光用に導入された電動バイクを使って、３０分ほど山道をサイクリングした。途中、透き通る水の流れる川にかかる橋の上を通ったり、貴重な黒いサトウキビ畑の中を通ったりした。おそらくそこに住む人にとっては日常のことであろうことが、日本から来た私たちにとっては見るものすべてが新鮮で、興奮に包まれる時間となった。

村に着いたらすぐにウエルカム・ゴング（無形文化遺産）にて歓迎のセレモニーがあった。とても神聖なもので私たちが触れたりすることはできないのかと思った。しかし、その後すぐに私たちにも演奏をさせてくれ、村の方との心の壁が取り去られたように感じた。

ここで感じたのは、村の方々がとても「美しい」ということ。それは単に伝統衣装を身にまとった容姿のことだけではなく、自分たちの村や文化を誇りに思っていることを含めてそのように感じた。村長が、「ムオン族独自の文化があり、その文化こそがアイデンティティである。一度失うと取り戻せないので、守り続けたい。」ということを話した。少数民族であるからこその言葉だと思うが、自分の、日本の文化を大切にしなければならないと思わせられる言葉だった。

＜カヨン族訪問＞

カヨン族も伝統的な衣装を身にまとい、舞で歓迎してくれた。男性はドラを、女性が舞を担当した。印象的だったのは、女性がとても楽しそうにしていたこと。伝統的な舞を継承しつつも、そこに自分たちの楽しみを見出しているように感じた。ここでは参加教員からの質問に、「町に行くことがありますか？」というものがあった。ほとんど行かないという回答だった。行かないのか、行けないのか不明である。ベトナム語とも違う言語を話す中で、どうしてもマイノリティを感じてしまうことはあるのだろうかとも考えた。訪問する側がそのようなことを想像する必要がないような状況になればよいのではと思った。カヨン族の方が我々をもてなしてくれたように、日本に来る外国の方に対しても温かく迎えられたらいいなと思った。　（長﨑）

◆海外研修 5 日目 2025 年 8 月 15 日（金）

JICA 草の根技術協力事業 視察「ダナン病院における新卒看護師臨床研修プログラム作成」、ホイアン旧市街視察

〇ダナン病院

ダナン病院は、ベトナム中部に位置するダナン市の中枢的な医療機関であり、1 日に約 100 件の手術を行う地域医療の要となる病院である。地方病院から医療従事者を研修生として受け入れ、技術水準を高めることで、患者が地元で治療を完結できる体制づくりを目標としている。

一方で、病院内には課題も見られた。大部屋には患者のプライバシーを守るためのカーテンがなく、また付き添いの家族が廊下やフロアに敷物を敷いて休む光景も見られた。給食が十分に提供されていないため、家族が食事を持ち込む場合も多く、医療設備や物資の不足を人の手と支え合いによって補っている現状である。

こうした課題に対し、JICA の草の根技術協力事業「ベトナム国ダナン病院における新卒看護師臨床研修プログラム作成」にて、社会医療法人愛仁会が支援を行っている。ベトナムでは看護師の国家資格がなく、看護師養成教育を履修することで看護職に就けるが、体系的な臨床研修が不十分であるため、両病院が協力してその不足を補う臨床研修プログラムを作成し、日本での研修受け入れも実施されている。

この支援を通じて看護師の育成体制が整い、医療の質の向上が図られている。愛仁会国際協力事業部門看護部長の宮本さんは、「ベトナム人は柔軟性があり、決まった後の行動力は非常に高い」と語っていた。ダナン病院が愛仁会に強い信頼を寄せている背景には、「してあげる」という姿勢ではなく、同じ目線で対等に向き合う支援の在り方があったと感じた。

また、研修のため来越していた日本人管理栄養士や理学療法士から話を聞くと、ベトナムにおいては、家族にリハビリ方法を指導する工夫や、生活習慣病の増加を踏まえた食生活改善が重要であるとのことだった。

決して充実しているとは言えない医療設備の中でも、多くの家族に支えられ、人の温かみを感じながら治療を受けられるベトナムの病院と、最新の医療設備に囲まれながらも、忙しさから家族がなかなか面会に来られない日本の病院を比較し、本当の幸せや豊かさとは何かを考える貴重な機会にもなった。

〇ホイアン旧市街

世界遺産ホイアンは、色とりどりのランタンが飾られた歴史ある港町である。観光客や現地の人々の活気ある声が飛び交い、街全体に賑わいを感じた。朱印船貿易の時代から日本や中国と深く結びついてきた歴史を随所に感じることができ、その長い歩みに歴史の重みを実感した。街並みを歩く中で、ホイアン水害の被害を伝える顕彰遺構や日本橋の修復など、各所に JICA の取り組みを見つけることができ、世界遺産の保全に多様な形で貢献していることを強く感じた。

特に印象に残ったのは、貿易陶磁博物館のお土産店で出会った枯葉剤被害を受けた人々である。ベトナム戦争や枯葉剤被害については研修前から関心を持っていたものの、実際に当事者の姿や声に触れる機会はこれまでなかった。ここで初めて話を聞くことができ、様々な障害を抱えながらも非常に高いコミュニケーション能力を以って、前向きに生きるベトナムの人々の姿が強く心に残った。彼らから話を聞き、この施設が就労の難しさや、子どもを産むことへの不安を抱える人々の職場となっていることを知り、訪問できたことが非常に意義深い経験となった。

戦争の影響により、今なお苦しみを抱えて生きている人々が確かに存在している。その人々を支えるような仕組みに日本の団体が関わっているという事実も知った。今回の出会いと学びを、決して忘れてはならないと強く感じた。（岩川）

◆海外研修 6 日目　2025 年 8 月 16 日（土）

ホイアン旧市街、ベトナム研修の振り返り

〇ホイアン旧市街

ホテルをチェックアウトする前の時間に、各自でホイアン旧市街を自由に見学した。ローカルフードを味わったり、ベトナムの民芸品を購入したりと、ベトナム滞在最終日だからこそ、思いきりベトナムの文化に触れる時間となった。私は旧市街のはずれにある日本人墓地を訪れ、平戸出身の貿易商人・谷弥治郎兵衛の墓（1647 年建立）に墓参りをした。谷弥治郎兵衛は日本とベトナムを結ぶ交易に携わった人物であり、江戸幕府の外国貿易禁止令に従って帰国せざるを得なかったが、ホイアンで亡くなった。この遺跡は 17 世紀にホイアンが商業港として繁栄していた当時、日本の貿易商人と当時の市民との関係が大変友好的であったという歴史を持つ。その墓石を前に、日本とベトナムの長い交流の歴史や、国際関係の変化が個人の人生に与えた影響について思いを巡らせる機会となった。本来この時間は、午後の帰国に備えてリラックスをするための時間でもあったとも思うが、参加教員は少しでも教材となるものを見つけ、今後の授業に生かそうと非常に意欲的に行動していた。

〇ベトナム研修の振り返り

午後、2 時間ほどの時間をとって、ホテルロビーにて研修全体の振り返りとフィードバックを行った。この日の振り返りでは、個々の振り返りにとどまらず、研修全体を通しての学びを整理した。日本とベトナムの歴史的・現在的なつながり、そしてその中で JICA がどのように関わり、どのような貢献をしてきたのかについて確認をした。そして何よりも「今を生きるベトナムの人々から私たちは何を学ぶべきか」という点についても意見を交わした。また、これからの日越関係がどのような形で発展していくことが双方にとって幸せなのか、という問いについても意見を出し合い、考えを深めた。

最後には、「幸せとは何か」をテーマに話し合い、「選択肢があること」「自由であること」「楽しめること」「帰ってくるまちがあること」など、参加教員それぞれの思いが率直に出された。事前研修で、開発途上国の課題として挙げていた「選択肢がない」というキーワードとも結びつき、「発展とは何か」を改めて考える機会となった。その中で、支援する側、される側という上下関係ではなく、国と国とがフラットな立場でともに歩み、ともに考えていく姿勢の重要性が共有された。

その後ホイアンからダナンへ移動し、最後に全員そろってベトナムの夕食を味わった。研修を締めくくるこの食事の時間は、ベトナムで過ごした日々、学びや気づきを振り返りながら、食事が終わるまで笑いの絶えないひとときとなった。（明石）

◆帰国後研修

〇日時　2025 年 9 月 28 日（日）オンラインにて実施
〇内容　・課題発表：「事前研修で定めた目標がベトナム研修で達せられた部分についてどのように学習指導案に取り入れられているか」について
・学習指導案の発表と講評（講評：飯塚市立穂波東中学校 校長 猿渡和則氏）
・今後の授業実践及び最終報告会についての確認

〇感想
今回の研修では、各参加教員の発表を通して、国際理解や外国とのつながりをどのように日々の授業や学校生活の中に位置付けているのかを具体的に知ることができた。研修前から示されていた「なぜ外国語を学ぶのか」「なぜ外国のことを知る必要があるのか」という問いに対し、どの先生も自らの経験や思いを軸にしながら授業を構想し、子どもたちに伝えようとしていることが強く印象に残った。単に知識を教えるのではなく、子どもたちがこれから生きていく中で必要となる視点や考え方を育てようとしている点に、この研修の意義を感じた。

特に心に残ったのは、ベトナム研修での経験や思い出を交えながら語られた授業案である。現地での出会いや出来事を大切にされていることが伝わり、国際理解教育の根底には「人との出会い」があるのだと改めて実感した。また、社会科の授業を中心に、家庭科や修学旅行など教科や行事を横断して学びを広げていたり、ALT や社会科の先生、外部機関と連携しながら学校全体で取り組んでいたりと、学びを学校の中だけで完結させない工夫と行動力を感じた。

さらに、高校や支援学校といったそれぞれの校種や生徒の実態に応じて授業を工夫されている点も印象的であった。育てて食べるといった体験的な学習や、外部からの評価を取り入れる取組みなど、生徒一人一人の姿を思い浮かべながら授業を組み立てていることが伝わってきた。奄美大島、日本、ベトナムといった複数の視点をもって授業を構想している実践もあり、同じテーマであっても視点を変えることで学びがより深まることを学ぶことができた。

ベトナム研修以降、今回が初めての研修であったため、オンラインではあるが久しぶりに参加教員と再会できたことも大きな喜びであった。それぞれの参加教員が異なる立場にいながらも、共通して「子どもたちのためによりよい授業をつくりたい」という思いをもって実践されていることを感じ、この研修のつながりの大きさと温かさを改めて実感した。

猿渡氏からは、成果と課題を明確にした講評をいただき、これまでの実践を振り返るとともに、今後どのように研修や授業を進めていくべきかを考えるヒントを得ることができた。今回の研修で得た

多くの学びや刺激を、自身の実践にどう生かしていくのかを今後も考え続け、子どもたちの学びにつながる授業づくりに取り組んでいきたい。自分自身も、もう一度気持ちを新たにして頑張ろうと思える研修であった。（長﨑）

◆学び合いネットワーク研修

〇日時　2026 年 1 月 31 日（土）、2 月 1 日（日）
〇内容
【1 日目】　教師海外研修最終報告会
・講評（飯塚市立穂波東中学校 校長 猿渡和則氏）
・総評（JICA 九州 次長 山口尚孝）
【2 日目】　第 4 回開発教育指導者研修：「伝えよう、つなげよう、開発教育・国際理解教育の輪！」 講師（特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター　伊沢令子氏）

〇感想
ちょうど１年前、この授業実践報告会を聴講し、「世の中にはこんなに面白い教育現場があったのか！」と、思わず嫉妬してしまうほど感動したことを、今でもはっきりと覚えている。
あのとき実践報告をされた先生方の発表は圧倒的で、自分が少しでも近づけたのかは分からない。しかし今回、報告する立場となり、海外での豊かな経験を経たからこそ、生徒に伝えたいことや考えさせたいことが自然と湧き上がってくるのだと実感した。校種や教科が異なれば、その思いをどう「調理」して授業化するかも違う。それぞれの実践報告から多くの刺激を受けた。
また、猿渡氏の指導助言からは、実践をさらに磨くための具体的なヒントと前に進む力をいただき、次の一歩を踏み出す大きなモチベーションとなった。
そして２日目のNIED・伊沢講師による研修。これこそが「次の一歩」を具体化する機会になったと感じている。多様な手法のワークを実際に体験し、学校に戻ったらすぐに実践したいと思った（テスト期間終了後に実施予定である）。活動終盤に各グループで話し合った「開発教育を広め、持続させるために必要なこと」では、多くのグループが「仲間」という言葉を挙げていた。教師海外研修の参加教員はもちろん、今回の学び合いネットワーク研修で出会った先生方とも、同じ志を持つ仲間としてこれからもつながっていきたい。出会いに心から感謝している。
猿渡氏も伊沢氏も、長年開発教育に携わってこられた、熱意と知識にあふれる素晴らしい方々だった。あのような教師になりたい。あのように生徒を導ける存在になりたい。そう強く思える目標に出会えたことに、深く感謝したい。（岩川）

授業実践報告

【実践者】

授業者氏名	明石　浩司	学校名	福岡市立福岡きぼう中学校
教科（科目）・領域	社会科(地理　公民)	対象学年（人数）	全学年全コース
実践年月日もしくは期間（時数）		2025 年 11 月～2026 年 2 月（8 時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：持続可能な社会の実現のために　～ベトナムと JICA の国際協力を通して～

2. 実践する教科・領域：
社会科(地理的分野)
社会科(公民的分野)
技術・家庭(食育)
総合的な学習の時間(国際理解)
学校行事(旅行)

3. 学習領域

	1	2	3	4
A多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
Bグローバル社会	相互依存	情報化		
C地球的課題	人権	環境	平和	開発
D未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：
　地球環境問題が私たちの暮らしや社会と密接に関わっていることを理解し、ベトナムを事例に、多角的な視点からその原因や現状、影響について考察する。また、ベトナムの自然環境・産業・人々のくらしを学び、日本との結びつきを考察することで、都市化や格差、環境問題といった課題がジブンゴトとして捉えられるようになる。さらに、JICA の具体的な取り組みを関連付けて理解し、国際協力の意義を SDGs や自分の生活と結びつけて考えることができるようにする。この学習を通して、持続可能な社会を築くために個人や社会全体として何ができるかを主体的に考え、解決に向けた具体的な行動を実践しようとする態度を養い、未来の社会をより良くする担い手としての意識を高める。

5. 単元の評価規準		
	①知識及び技能	ベトナムの地理的特色や日本とのつながり、JICA の取り組みについて正しく理解している。
	②思考力、判断力、表現力等	資料をもとに課題を発見し、日本とベトナムの協力の意義について自分の考えを表現できる。
	③学びに向かう力	国際協力をジブンゴトとして捉え、学びを深めようとする姿勢が見られる。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】
　ベトナムは、豊かな自然環境に恵まれ、農業や漁業が盛んな一方、急速な都市化が進み、製造業やサービス業も発展している。この経済成長は、人々の生活水準を向上させる一方で、格差の拡大や環境問題といった新たな課題を生み出している。日本は JICA を通じて、医療支援、地方のインフラ支援など、ベトナムが抱える課題解決のための多様な支援を行っている。これらの取り組みは、SDGs の達成に貢献するものである。国際協力は、遠い国の出来事ではなく、ベトナムで生産された製品を私たちが消費するように、私たちの生活と密接に結びついている。国際協力の意義を考えることは、SDGs をジブンゴトとして捉え、より良い世界の実現のために自分に何ができるかを考えるきっかけとなる。
　本単元では、現代社会が抱える地球規模の課題を多角的に捉え、生徒自身が持続可能な社会の担い手としての意識を高めることをねらいとしている。アジ

	アの一員であるベトナムを事例として、その自然環境、産業、人々の暮らしを通して日本との密接な結びつきを考察し、表現していくことは、持続可能な社会を実現するために何ができるかを主体的に考え、行動しようとする態度を養う上で大変意義深い。 【児童／生徒観】【教材観】 福岡きぼう中学校は2022年4月に開校した、学齢期を過ぎた人で、さまざまな理由で中学校の授業を十分に受けることができなかった人のための公立夜間中学校である。登校する生徒は10代から80代まで幅広く、2割は外国籍の生徒である。本校のニーズとしては義務教育の学習内容を学びつつ、社会性を身につけ、豊かな未来への一歩へつながるような教育活動が最も必要となる。生徒は中学校教育を受けられなかったことは共通しているが、高校・大学に進学し高い学力を身につけた生徒もいる。その一方で、戦後の混乱期から中学校教育を受けられなかった高齢の生徒は、ひらがなや漢字の読み書きからはじめたいと思っている生徒も少なくない。そこで、小学校の内容からゆっくりと教育活動を行うことも必要となってくる。また、外国籍の生徒は日本語習得と中学校の卒業資格取得を目指しているので、日本語指導をさらに充実して行う必要がある。社会科の学習が得意な生徒が多く、社会の出来事についてニュースや新聞を見て社会的事象への関心も高い。 授業は「特別の教育課程」において授業づくりを行っている。授業時間の開始15分は「今日のニュース」というテーマで、時事問題と社会科の単元をつないで授業を行っている。授業時間が昼間の中学校よりも著しく少ないため、地理的分野と公民的分野の単元を「今日のニュース」で補っている。また、ICTに対し苦手意識を持っているため、月1回程度はタブレットを活用した授業を行っている。この単元でもICTを活用し、意見交流を行う場面を増やすことで、学習への理解をより深められるよう工夫したい。 また、これに加え、学校行事である修学旅行でのJICA九州訪問、技術・家庭科におけるベトナム料理作り、総合的な学習の時間での国際理解教育「お国自慢」を連携させることで、多角的な視点から学習を深める。特に、国際理解教育「お国自慢」では、中国、韓国、ボリビア、フランスにルーツを持つ生徒によるプレゼンテーションに加え、ベトナム、マラウイ、タイについては海外研修経験のある教員が発表する。このように、教科を横断した学習機会を設定することで、多様な文化や価値観に触れることができ、国際協力の意義をより深く理解させることができる。 【指導観】 本単元の指導にあたっては、まず世界地図を用いてベトナムの位置を確認したのち、メコン川流域の自然、都市の発展の様子、農村のくらしなどを写真資料や貿易統計を通して、「ベトナムと日本はどんなつながりがあるだろう」という学習課題を提示し考察させるよう仕組む。 次に、急速な工業化に伴う環境問題、医療体制の不十分さ、教育格差など、ベトナムが直面している課題を資料で提示し、そのうえで、「JICAの支援によってどのような課題が解決されそうか」という学習課題を提示し考察させるよう仕組む。 次に、持続可能な社会の実現という視点を導入し、SDGsの目標を提示し「日本とベトナムの協力から学んだこと」「自分にできる国際協力」をスライド等

	にまとめて発表させる。最後に「国際協力はなぜ大切なのか」「自分にできる一歩は何か」を振り返りシートに記入させる。 　以上の実践を通じて、地理的分野・公民的分野の学習内容を具体的な国際協力の事例と結び付けることで、生徒が世界と日本の関わりを実感的に理解し、持続可能な社会の実現に向けた主体的な学びにつなげさせる。また、技術・家庭科、総合的な学習の時間、学校行事との連携により単元の内容の深化を図る。

7. 単元計画（全８時間）
単元を貫く問い「持続可能な社会を実現するために私たちは何ができるでしょうか。」

時	学習課題と問い	学習活動	資料など
１ 地 理	学習課題：「ベトナムの特徴と日本との結びつきを理解する」 問い：「ベトナムと福岡県はどんなつながりがあるだろう？」	・世界地図からベトナムの位置を確認する。 ・身の回りにあるベトナムのものから、福岡市や日本とどのようなつながりがあるか考察する。	・写真 ・タブレット ・グラフ ・ワークシート
２ 地 理 （本時）	学習課題：「ベトナムの課題と日本の協力を結びつけて考える」 問い：「ベトナムの急速な工業化により、どのような課題があるだろう？」	・ベトナムが抱える課題（急速な工業化、医療問題、森林率の減少）を資料から考察する。 ・JICA の支援により、どのような課題が解決されるか考察する。	・写真 ・タブレット ・グラフ ・ワークシート
３ 行 事	学習課題：「JICA の取り組みを課題解決の方法と結び付ける」 問い：「JICA の支援により、どんな課題が解決できるだろうか？」	・前時に考察した JICA の取り組みを、視察を通して、より具体的に考察する。 ・様々な国の料理を食べる。	・JICA 九州視察 ・ワークシート
４ ５ 公 民	学習課題：「2030SDGs ゲームにより、持続可能な社会について考える」 問い：「持続可能な社会とは何か？」	・2030SDGs ゲームを行う。	・2030SDGs ゲーム
６ 公 民	学習課題：「持続可能な社会の実現に、自分たちはどう関われるか考える」 問い「持続可能な社会の実現に向けてわたしたちはどのように関わり行動すべきか？」	・2030SDGs ゲームから SDGs の本質を学ぶ。 ・ベトナムをはじめアジアの課題をふりかえり、課題解決を考察する。 ・持続可能な社会の実現に自分はどのように関われるか考察する。	・写真 ・ワークシート
７ 総 合	学習課題：「『お国自慢』を通して、それぞれの国の良さを理解する」	・日本、中国、韓国、ボリビア、フランスにルーツを持つ生徒と、ベトナム、マラウイ、タイに行ったことのある教員がプレゼンを作成し発表する。 ・感想をワークシートに記入する。	・プレゼン ・ワークシート

8 家 庭	学習課題：「ベトナム料理を作ることで、文化のちがいを理解し、これからもいろいろな国の文化を学ぶ力をつける」	・調理実習でベトナム料理を作る。	・材料

8．学びの構想図

学習の流れ	学習内容	関連活動	ねらい・成果
導入	ベトナムの自然環境・産業・暮らしの理解	社会科	基礎理解
発展	ベトナムと日本の結びつきを考察	社会科	相互理解
課題把握	都市化・格差・環境問題	社会科	現代的課題を知る
解決	JICAの取り組み	修学旅行(JICA九州訪問)、技術・家庭科(ベトナム料理)	国際協力を多角的に理解
考察	国際協力の意義を考える	総合(お国自慢)	国際協力の必要性を理解
まとめ	SDGsと生活を結びつける	総合(2030SDGsゲーム　ふりかえり)	SDGsを自分事化
終結	未来の社会をより良くする担い手としての意識	全体学習	主体的学びへ

9．本時の展開（概略）
学習課題：「ベトナムの課題と日本の協力を結びつけて考える」
問い：「ベトナムの急速な工業化により、どのような課題があるだろう？」

過程	学習課題・学習活動・問い	留意点○ ポイント◆	資料（教材）
導入 （5 分） 課題を つかむ	・ベトナムの都市の写真と農村の写真を見る 問い「この国が急速に発展する中で、どんな課題が生まれていると思う？」	○課題を予想させる。 ◆渋滞、環境汚染、貧富の差、医療不足	・写真 ・ワークシート
展開 （30 分）	「ベトナムの急速な工業化により、どのような課題があるだろう？」		
	・3 つのグループに分かれてそれぞれの事例を読み取り、課題と解決策をワーク	○課題を 3 つ「環境・医療・農業」に整理する。	・統計(人口増加、GDP 成長率) ・写真(森林伐採、

	シートに整理する。 ・それぞれのグループで発表用のスライドを作成する。 ・発表する。 問い「ベトナムの課題に日本はどのように関わっているだろうか」 ・3つの資料を見る ・個人でワークシートに記入する	○3 つのグループに分け、それぞれのグループで課題を探求させる ○JICAとの関わりに着目させる。 ◆数名発表させる 「医療がよくなると人々が安心して暮らせる」「環境を守ると将来の資源が残る」	洪水、病院の混雑） ・ワークシート ・生徒用タブレット ・ダナン病院での看護師臨床研修 ・メコンデルタの農業支援 ・森林再生活動
まとめ （5分）	次時予告：「修学旅行で JICA の取り組みを学ぶ」	○JICA九州を簡単に紹介する	・スライド「JICA九州」

10. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）

・ベトナムの自然・産業・社会的課題について、統計や写真資料から適切に理解している。〈知識・技能〉→ワークシート

・日本とベトナムの協力の意義を考察し、自分の意見を表現できる。〈思考・判断・表現〉→スライド作成および発表

グループ活動や発表に積極的に参加し、他者の意見を受け止めながら学びを深めようとしている。〈態度〉→振り返りシート

11. 学習方法および外部との連携

・写真資料や貿易統計を通して、学習課題を提示し考察させる。

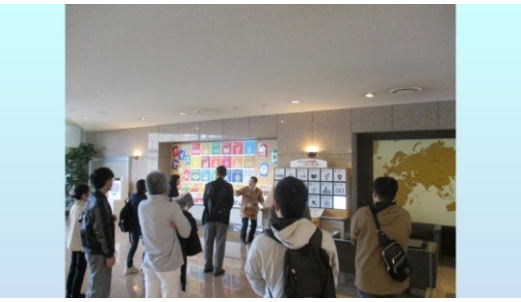
・JICA については、JICA 九州の視察を通して、その目的や意義を理解し、学びを深化させる。

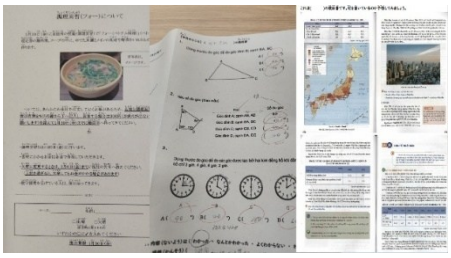
・2030SDGs ゲームを実施することで、SDGs の必要性や、それによって生まれる可能性を体感的に理解させ、学習の深化を図る。

・総合的な学習の時間における国際理解教育「お国自慢」の取組と、技術・家庭科でのベトナム料理作りの学習を関連づけることで、異なる教科や活動を横断的に結び付け、文化的背景や生活習慣の違いを理解しながら、多角的な視点から学習を深める。

【自己評価】

12. 成果	ベトナムをはじめとする国々が、日本やJICAと深くつながっていることを学ぶことで、生徒にとって「遠い国」であったベトナムは、「身近な国」へと認識が変化した。これまで地図や名称として捉えていた国が、日本の社会や自分たちの生活と結びついた存在として理解されるようになったのである。 実際に、生徒からは「ニュースやテレビ番組でベトナムが取り上げられると、授業で学んだ内容を思い出し、以前より身近に感じるようになった。」という声が聞かれるようになった。このことは、学習が教室内の知識にとどまらず、日常生活の中で意味をもって活用され始めたことを示している。 ベトナムの学習を通して、生徒の中で世界の捉え方が変容し、国際的な出来事を「自分とは関係のない話」ではなく、「自分たちの社会とつながる事柄」として考える姿勢が育まれたといえる。これは、知識が生活と結びつき、主体的な理解へと深まった成果である。

	さらに、修学旅行を通して JICA への理解が学校全体に広がり、生徒・教員ともに JICA を知らない者がほとんどいなくなった。これにより、教員間で国際理解教育に関する共通理解が進み、他教科との連携が図りやすくなるなど、教育活動の幅が広がった。その結果、学校全体として協力体制が強化され、組織的に国際理解教育に取り組む基盤が整ったことも大きな成果である。
13.　課題及び改善点	限られた授業時間の中では、学習内容を十分に深めることや、生徒が課題を自分事として捉え、主体的に調べたり行動に移したりするための時間を確保することが難しいという課題がある。知識の理解にとどまらず、問いを立て、考えを深め、実践へとつなげる段階まで到達するには、時間的余裕が不足しているのが現状である。 そのため、学習の継続性や発展性をどのように保障するかについては、今後も授業構成や学習機会の工夫を重ね、改善していく必要があると考えている。
14.　活動のようすなど	
15.　授業スライド	「身の回りのベトナム」（1 時間目～2 時間目） 「ベトナムの急速な工業化により、どのような課題があるだろう_」（2 時間目～3 時間目） **現地で特に深めたいこと** ・他の国の文化の影響(歴史) 【欧米列強の侵略と条約改正　緊張緩和と日本外交】 ・持続可能な森林とコーヒー栽培(地理　公民) 【SDGsについて (2030SDGsゲームの振り返り教材)】 ・ベトナムの平和教育(道徳) ・ベトナムの衣食住(地理　総合) ・ベトナムの牛乳(カフェの店長より)(総合)

16. 今回の 研修を 通して	「海外研修を通した国際理解教育の実践と展望 ― ベトナム研修から学校現場へ ―」 2026 年 1 月 21 日「学び合いネットワーク研修」発表スライド  現代社会は、内集団バイアスやポピュリズムが、以前にも増して強まりやすい状況にある。そのような時代だからこそ、国際理解教育の重要性は一層高まっていると考える。国際理解教育を進める上で、強く意識しておかなければならない点がある。それは、「国際貢献」という言葉の中に、無意識のうちに上下関係が入り込んでしまう危険性である。私たちは本当に「貢献してあげる側」なのか。社会貢献という行為はあり得るとしても、国と国との関係は本来、対等でフラットであるべきである。 ベトナムをはじめとする他国から、私たちはどれだけ多くのことを学んできたのか。その生き方や価値観を、どれだけ尊重できているのかを問い直す必要がある。貢献する、されるという一方向の関係ではなく、対等な視点で他国を捉えることができてこそ、本当の国際理解教育であると考える。 もし生徒が、他国や異なる文化を蔑ろにしたり、格下のように捉えたりするようであれば、それは国際理解教育が十分に機能していないことを意味する。その責任は、教育に携わる者にある。この点を決して忘れてはならない。 今後も、日常の授業の中で、国や文化を対等に捉えるフラットな視点を育てる国際理解教育を、継続して実践していきたいと考えている。

参考文献等

・JICA 国際協力機構
JICA 九州
今井健一　アジアの環境問題と九州のビジネスチャンス
福岡市
NHK for School（ホームページ）
・『歴史』『地理』『数学』『英語』教科書（ベトナム教育出版局）
・未来を変える目標 SDGs アイデアブック（蟹江憲史・一般社団法人 Think the Earth）
・2030 年の世界地図帳（落合陽一・SB Creative）
・SDGsSTART BOOK（EduTown SDGs アライアンス・東京書籍）

【実践者】

授業者氏名	林　愛恵	学校名	私立筑陽学園中学校・高等学校
教科（科目）・領域	英語コミュニケーションⅠ/論理表現Ⅰ/LHR	対象学年（人数）	中高一貫１年Ａ組（ 30 名） 中高一貫１年Ｂ組（ 22 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2025 年 9 月 ～ 2026 年 1 月（ 13 時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：ベトナムを通じて多文化共生社会について考える

2. 実践する教科・領域：

英語コミュニケーションⅠ / 論理表現Ⅰ/ LHR

3. 学習領域

	1	2	3	4
Ａ多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
Ｂグローバル社会	相互依存	情報化		
Ｃ地球的課題	人権	環境	平和	開発
Ｄ未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

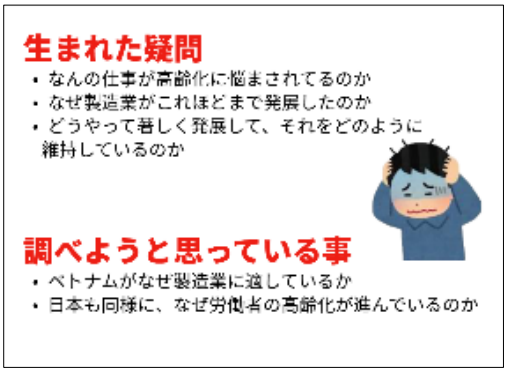
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：
・ベトナムの現地の学生や留学生との交流を通じて、ベトナムの文化や社会を学び、学んだことを他者に伝えて、異文化理解・異文化交流に担い手となる。
・世界や日本の移民の現状について、事例やデータなどをもとに英語で議論し、多角的な視点から移民問題や多文化共生社会についてジブンゴトとして考えることができる。

5. 単元の評価規準		
	①知識及び技能	・ベトナムの人々との交流を通じて、ベトナムの文化や社会、その背景について理解できる。 ・「日本は移民を積極的に受け入れるべきか」というテーマについて、事例やデータ等を用いて、論理的に英語で討論できる。
	②思考力、判断力、表現力等	・ベトナムの人々との交流や調べ学習を通じて、現地の文化や社会について学んだことを外部の人に分かりやすく展示する。 ・上記のテーマについて、賛成反対両方の立場での討論を行い、多角的な視点と当事者意識を持って、移民問題や多文化共生社会について自分の考えを持つことができる。
	③学びに向かう力	・ベトナムの人々や留学生との交流の場に向けた事前の準備や当日の活動に、積極的に取り組んでいる。 ・上記のテーマについて、複数の資料を探したり、現地の人や知見のある人に尋ねたりして、偏った資料や視点にならないよう心掛けている。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】
　自国ファーストの風潮が高まっている今だからこそ、持続可能な社会を築く為には、国際社会についてジブンゴトとして考え、行動できる姿勢の育成が重要だと考える。この姿勢の育成を目指し、ベトナムの文化や社会について興味を持ったうえで、ベトナムの人々との関連性の高い移民問題に目を向け、「日本は積極的に移民を受け入れるべきか」というテーマについて賛成反対両者の立場から討論するという活

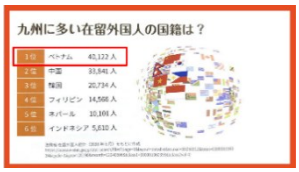
	動を行う。これらを通じて、移民問題や多文化共生社会についてジブンゴトとして、そして多角的に考え意見をもてるようになることが狙いである。 【児童／生徒観】 　担任をしているＢクラスと、単元によっては横並びのＡクラスを対象とする。両クラスの生徒は、中学の時には留学生と交流したり、オーストラリアへの語学研修に参加したりして、異国への興味や英語の学習意欲は高い。一方で異国への「興味」に留まっている為、彼らに日本と他国との関係や問題、国際社会をジブンゴトとして考える姿勢や多角的な視点を養うことの重要性を認識して欲しい。 【教材観】 　「日本は積極的に移民を受け入れるべきか」というテーマは、自身の住んでいる日本や他国の現状や実例を比較しながら学び、国際社会に目を向けて考える必要があるテーマである。移民問題や多文化共生社会にベトナムは大きく関わっている。交流や展示を通じて、ベトナムという国や人々に興味をもつことは、生徒たちがより関心やジブンゴトとして後半のテーマに取り組む土台を作ることに繋がると考える。その後、私自身がベトナム研修で見た場面とその背景にある事実や理由に驚いた経験を、特定の情報や偏った視点を持ってしまった実例として生徒に提示する。ここでは、上記のテーマは正確且つ複数の資料や多角的な視点を持って考えなければならないと生徒に認識させることに繋げたい。また、上記のテーマは知識や現状への理解がなくては建設的な議論や討論は難しいと考える。今までの活動で得た知見があるからこそできるものとして、最後にクラス内の枠組みで終わるのではなく、様々な背景を持った人との意見交換を行い、更に生徒の知見や思考を深めることに繋げたい。 【指導観】（9 月に現地校の学生との交流を終えた時点で記入している） 　調べ学習や交流を通じて、生徒たちはベトナムの文化や社会に興味をもっていると感じている。そして、ベトナムの文化や社会に積極的に興味をもっていると考えられる。しかし、移民問題について軽く触れた際に、移民の受け入れは反対だという生徒が多数を占めた。この問いに対する意見は人それぞれだが、生徒たちの話を聞いていると狭い情報源でその考えに至っているということを感じた。上記のテーマでの討論に際し、今の知識や情報だけでなく、広く調べたり、実際に関わっている人々の話を聞いたり中で、多文化共生社会の在り方について多角的に考える重要性を自発的に認識できるよう、指導していきたい。

7. 単元計画（全 16 時間）			
時	ねらい	学習活動	資料など
1 LHR	ベトナムについて知る①	ベトナムについて興味を持ったこと、これからの交流で知りたいことを発表する。また、教員の研修の発表を聞き、現地の様子を知る。 	生徒たちが調べた資料 教員が作成したスイド
2 英	ベトナムについて知る②	現地の高校生とオンライン交流を英語で行い、ベトナムの文化や学校生活について知る。 	生徒たちが調べた資料 / iPad
3 英	ベトナムについて知る③	日本にいるベトナムの留学生と交流して、ベトナムの文化や経済、戦争などについて学ぶ。 	留学生が用意した資料

4 学校 行事	ベトナムの文化や社会を他者に伝える	文化祭で1～3時間目で学んだベトナムの文化や社会を伝える展示を行う。 	民族衣装（JICA） ベトナムのゲーム ベトナムの食材 生徒が作成した 資料等
5 英 本時	多角的な視点で物事を捉える重要性を認識する	ベトナムと移民問題の繋がりや、教員の研修での経験を通じて、自身で深く調べて多角的な視点で物事を捉える重要性を認識する。	撮影した写真 新聞記事 JICAパンフレット
6～10 英/論	「日本は積極的に移民を受け入れるべきか」というテーマでディベートコンテストで討論する為の準備をする	テーマについて賛成・反対両方の英語で意見を述べる準備をする。調べるだけでなく、今まで交流したベトナムの人々を始め、他国の人々や知見のある人に話を聞いたりする。	JICAからいただいたパンフレット 生徒の学習に 協力いただける方

11～12 英/論	「日本は積極的に移民を受け入れるべきか」というテーマでディベートコンテストで討論する	テーマについて賛成・反対両方の立場でデータや事例をもとに、論理的に英語で討論する。 	生徒たちが調べた資料 iPad
13 英	多国籍の学生と日本や他国移民について議論する	日本への移民が多い国の留学生と議論して、留学生の自国の現状や日本で移民に関することで感じていることを学ぶ。 	留学生に向けた共有資料 ワークシート

8. 本時の展開（概略）
本時のねらい：移民問題について議論をしたあと、教員の研修での話を聞いて、「日本は積極的に移民を受け入れるべきか」というテーマに対して、多角的な視点で捉える重要性を認識する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (8 分)	●次の質問について、ペアになって、英語で会話する。 “What new things have you learned through the exchanges with Vietnamese and the research about Vietnam?” ●次の質問について、ペアになって、英語で意見を言う。 “Do you think we should accept immigrants actively? And why?” → 数名が全体で意見を発表する。	話しやすいように、今までの活動の写真をスライドに掲示する 1 回目は日本語で相手に伝え、再考する時間を取り、2 回目は英語で伝える。 分からない表現は iPad で調べるよう指示する。	スライド
展開① (10 分)	●ベトナムと移民に関して、知っていることをペアになって、英語で伝えあう。 ●教員の説明を聞き、ベトナムと日本の移民の現状の関係を理解する。	分からない表現は iPad で調べたり、日本語で補足したりするよう指示すう。	iPad JICA「多文化共生ってなんだろう？」 
展開② (10 分)	●次の質問について、ペアになって、スライドの写真を見ながら答えを考える。 “These are photos taken in Vietnam. I thought these scenes were unfamiliar and strange at a glance. What made me feel so?” ●教員の説明を聞いて、写真の背景を理解する。また、物事を深く調べたり、多角的な視点で捉えたりする必要性を理解する。	黒板に研修中に訪れた場所を書いて、まずその中からどの施設の写真かを生徒に考えさせ、全体で確認する。その後、何に違和感をおぼえたか予測させる。	スライド iPad

展開③ （30 分）	●自分が先ほど伝えた意見の中で伝えたことを書き出し、自分が答えた考えや理由を サポートする事実や事例を調べる。（10 分） ●ペアで調べた結果をシェアする。（5 分） ●JICA のホームタウンの記事を読む。	調べる方法や視点が分からない生徒がいれば、助言をする	記事（東京新聞）
まとめ （7 分）	●改めて、物事を深く調べたり、多角的な視点で捉えたりする必要性を理解する。 ●今日の授業の感想をロイロノートで提出することを確認する	「なんとなく怖い」という単語を取り上げる 分からない単語があれば調べるように指示する	

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）
ロイロノートの感想から以下の二点の項目から評価する
●ベトナムの写真、移民についての調べ学習、JICA のホームタウンの記事、どれかこのうち一つの内容に触れて自分が知らなかったことや思い込みをしていたことについて書けているか
●自身で深く調べて多角的な視点で物事を捉えていく重要性を認識し、それを今後の活動で意識したり実践したりしていきたいという意思が見られるか

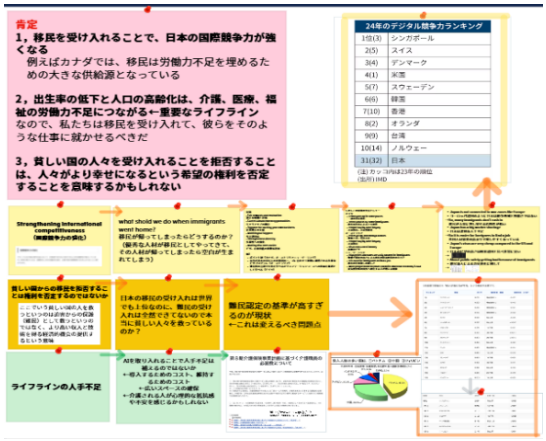
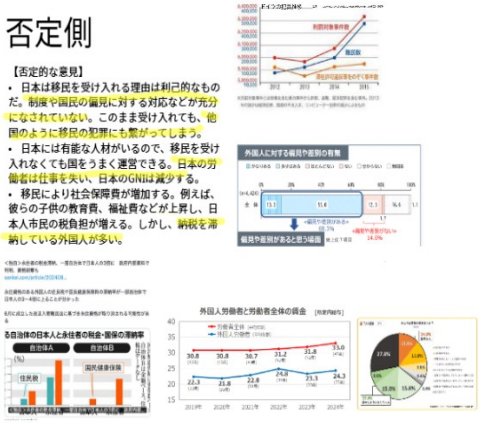
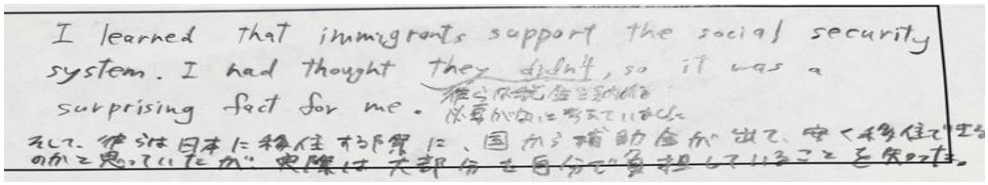
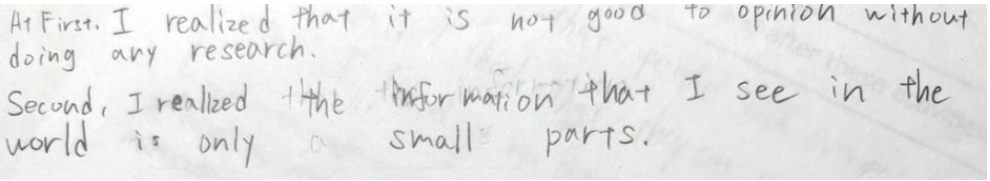
10. 学習方法および外部との連携（単元ではなく、本時を通じての連携を記載している）
●ベトナムの人々との交流の機会を設け、それを文化祭で展示として外部に披露する活動を行った。これにより、ベトナムをより身近に感じられ、その国が大いに関わる今回のディベートのテーマに対して、生徒たちがより興味をもってジブンゴトとして考えながら、取り組むことに繋がったと考える。
●ディベート大会の準備段階で、ネットや書籍等で調べるだけでなく、実際に人に尋ねることを推奨した。交流したベトナムの留学生や現地の学生、中学 3 年生の時にホームステイでお世話になったオーストラリアのホストファミリーに向けて、質問をする様子が見られた。その他、私の知人で尋ねたい人がいれば申し出るよう声掛けをして、質問を依頼してくる生徒もいた。
●本テーマについて、日本への移民が多い国の留学生と議論する機会を設けた。クラスや日本人の間で終わるのではなく、様々な背景を持った留学生と議論することで、日本の移民問題に関連する当事者たちがどのように感じているか学び、思考を深められたり、各国の現状を学び、更に異国について興味を持ったりしていたようだった。

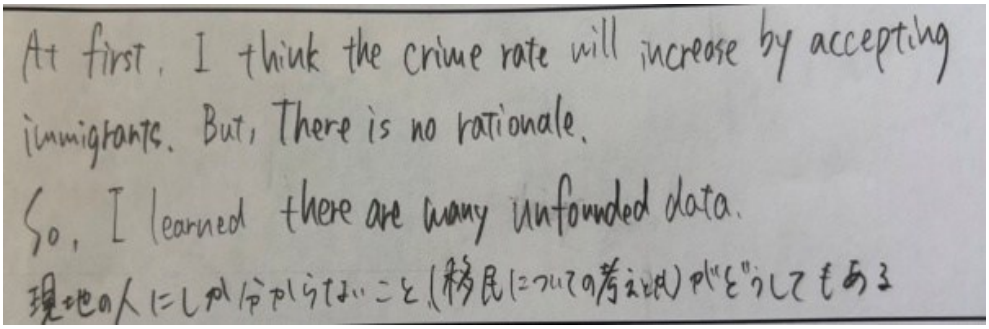
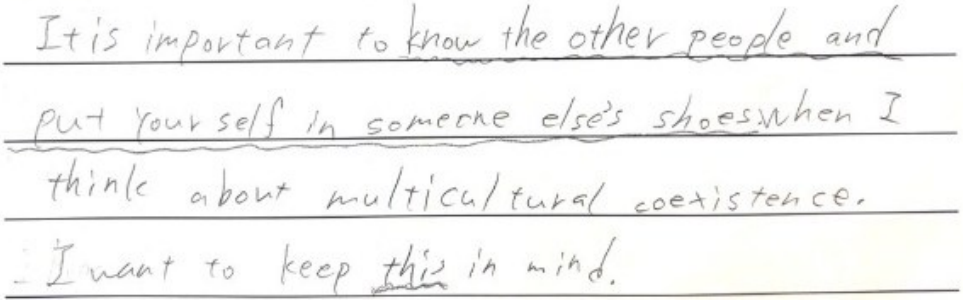
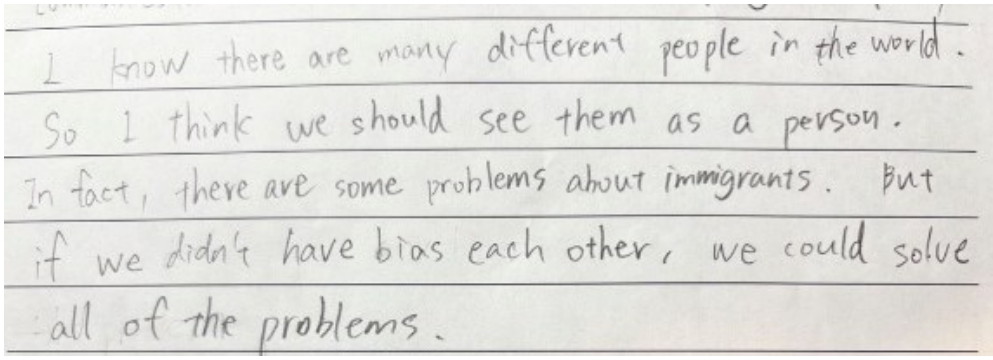
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み
●単元の全体としては、文化祭や学校行事としてのディベートコンテストで多くの人に学習の成果を見ていただく場を設けることができた。最後の留学生との交流会には学校の広報の方も来て、今回の英語教育、国際理解教育の実践の紹介にも繋がった。
●11 月上旬に学校内で研究授業発表を行った。諸事情あり、研修ではなく、教科書の内容を行ったが、その際に国際理解教育/開発教育も取り入れた。インドのスラム街の子供たちが書いた記事を読み、自身で調べた現地の現状に触れながら、一番印象に残った

記事の一文とその理由を英語で述べるという内容だ。同教育を取り入れたいという声や、社会科の教員からは教科横断での授業に取り組んでみたいという声を頂いた。 ●本校のテレビ放送を用いて、ベトナム、アフガニスタン、ウクライナの留学生を招き、自身の体験や思いを伝えていただき、学校全体で平和学習を実践したいと考えている。この際、ファシリテーターは各クラスの担任の先生になる為、先生方の同教育の実践に繋がると考える。なお、本活動は次年度以降を予定している。

【自己評価】

12. 成果	まず、国ではなく人として見ることの大切さを実感したようだった。ベトナムの方々との交流を通じて、ベトナムの国や文化を興味深く感じたことは勿論だが、それ以上に感想には「英語が得意でスピーチコンテストにも出ていてすごい子だった。」「ナムさんは日本のルールは厳しいと語学学校の友人は言うけれど、私はあまりそう感じないと言っていて色んな人がいると感じた。」といったその「人」について触れている生徒が多かった。授業の最後には、「国ではなく人として向き合っていくことが大切だ。」といった内容を感想に書いている生徒が数名おり、それを全体に共有した際に頷く生徒も多く、この姿勢が一番大切であると感じた。 次に、自分自身で調べたり考えたりする重要性を実感したようだった。初め、「日本は移民を積極的に受け入れるべきか」という問いを投げかけた時に、反対意見が多数を占めており、理由として「移民の人が罪を犯したというニュースをよく見るから、なんとなく怖い。」「外国人に仕事を奪われ、日本人が貧しくなる。」といった意見が多かった。しかし実際調べてみると、日本人の犯罪率と大差がなかったり、長期的に見れば日本の経済の発展が見込まれるという事実が分かったりした。肯定側だけでなく、否定側の意見も準備した為、両者の目線から本問題を考えたことで多角的に物事を見る大切さや様々な立場の国や人が納得いく形に模索する難しさも実感したようだった。本学習・活動の最後に同じ問いをした時は、大きく結果が変わっており、移民の受け入れに賛成する生徒が半分以上を占めていたことが印象的だった。
13. 課題	移民問題や多文化共生社会についてジブンゴトとして考えることには繋がったが、ベトナムについてジブンゴトとして考える機会をあまり設けられなかったことが何よりの反省だ。教師海外研修としては一度区切りがつくが、ベトナムの ODA や国際理解についての活動を授業で取り上げ、上記を必ず実践したい。 また、ディベートコンテストに向けて生徒が集めた資料の信憑性を判断することが難しかった。あくまでもこの活動は、相手の言ったことを理解し、効果的に返せるかを重視した活動だった為、そこまで資料の信憑性を細かくは確認まではしなかったが、あまりに極端なものについては、リソースや切り取り方を確認したり、他教科の先生に意見を求めたりした。 最後に、移民をテーマに留学生と交流する際に、留学生に専門性がなく、事前準備が必要だったことだ。参加を希望する留学生によってそこは左右されてくる為、仕方ないことでもある。生徒が調べた資料を簡潔に日本語でまとめて共有する等して、準備をして交流を行った。
14. 改善点	基本的なことだが、何が一番の目的なのか忘れず、優先順位をしっかりつけることが最も大切だと考える。本単元を実施するにあたり、色んな活動や学習を取り入れたり、外部の方と連携したりということがでてくるが、その中で軸がぶれてしまったり、活動の内容にズレが出てしまったことが多少な

	りともあったように感じる。もちろん全てが思い通りにいくわけではないが、他教員の助言も頂きながら俯瞰して進めていくことが重要だと考える。 　調べ学習の資料についてはリソースをある程度指定しておくと良いと感じた。論文や新聞など信憑性が高いものを主に活用し、ネットニュース等リソースとして不安なものは教員に相談するようにすれば、かなり質のよい資料が集められると考える。また、専門性のある方に協力や助言を頂くことは、大変重要だと感じた。本活動・学習を通じて、JICA や大学の方、友好会の方など、快く協力してくださる方は多くいることを実感した。
15. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノート）	〈本時後、ロイロノートで提出された生徒の意見〉 ・ I was surprised that there are many female principles, but I was surprised more that this is because Vietnamese think women are good at education. We don’t have such stereotypes. But we should think we also have stereotypes. ・ At first, I think the crime rate is increasing by accepting immigrants, but it is there is no rationale. I learned there is much information we don’t know. ・ I didn’t know much about JICA’s news. I didn’t know that people got scared because of their misunderstanding. I think “なんとなく” is dangerous. It will cause a big misunderstanding and it may sometimes hurt people. We need to research a lot. 〈ディベートコンテストの資料〉※留学生との交流向けに日本語になおしたもの   〈留学生との交流後の感想〉  I learned that immigrants support the social security system. I had thought they didn't, so it was a surprising fact for me. 彼らは社会保障を利用する必要がないと考えていました。 そして、彼らは日本に移住する際に、国から補助金が出て、安く移住できるのかと思っていたが、実際は大部分を自分で負担していることを知った。  At First, I realized that it is not good to opinion without doing any research. Second, I realized the information that I see in the world is only small parts.

	 At first, I think the crime rate will increase by accepting immigrants. But, There is no rationale. So, I learned there are many unfounded data. 現地の人にしか分からないこと(移民についての考えなど)がどうしてもある  It is important to know the other people and put yourself in someone else's shoes when I think about multicultural coexistence. I want to keep this in mind.  I know there are many different people in the world. So I think we should see them as a person. In fact, there are some problems about immigrants. But if we didn't have bias each other, we could solve all of the problems.
16. 授業者による自由記述	多くの方の協力を得て、これまでの国際理解教育/開発教育実践を行うことができ、心から感謝している。また、生徒も調べ学習や事前準備もあった中、前向きで取り組んでくれて頼もしく思うと共に、そして本単元を通じて様々なことを学べて勉強になったと生徒自身も成長を実感しており、嬉しく思っている。私が何よりうれしく感じたことは、「日本は積極的に移民を受け入れるべきか」というテーマに対して賛成意見を述べる際に「貧しい国や自分の生活を良くしたいという人たちの権利を守るべきだ。」という意見、それに基づき、日本の移民の多くを占める国の賃金や就職の現状を補足として説明している班が数班あったことだ。日本側だけでなく、日本に来る外国側の視点にも立って、それを自分たちの主張として選択してくれた姿勢には胸が熱くなった。しかし、ここからが本番で、生徒たちに国際社会についてジブンゴトとして「考える」から「行動できる」ようになっていって欲しい。同教育の果てしなさを感じると共に、更なる実践に向けて精進していきたいと強く思う。

参考資料：

・「ホームタウン」JICA が撤回しても続く抗議…外国人は「なんか怖い」が、排外主義の成功体験になるまで：(2025 年 9 月 30 日・東京新聞デジタル)

・多文化共生ってなんだろう？(2022 年 3 月・JICA 九州センター)

【実践者】

授業者氏名	小林　佳愛	学校名	佐賀大学教育学部附属小学校
教科（科目）・領域	外国語活動、総合	対象学年（人数）	3 年 2 組（35 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2025 年 9 月～1 月（7 時間）	

【実施概要】

1. 単元名：世界から自分を見つめよう

2. 実践する教科・領域：
外国語活動、
総合的な学習の時間

3. 学習領域

	1	2	3	4
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
B グローバル社会	相互依存	情報化		
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標

・外国の生活や文化、人々の考え方に触れることを通して、自分と異なる文化があることを理解し、受け入れようとする態度を育む。

・外国語におけるコミュニケーションを通して、相手に自分の考えや気持ちを自分の言葉で伝えることのよさを知り、やり取りに生かすことができる。

5. 単元の評価規準		
	①知識及び技能	・外国の文化や日本との関わり、国際協力の取り組みについて理解し、自分の生活とのつながりについて理解している。
	②思考力、判断力、表現力等	・日本と外国の常識や文化の違いに気付き、それを多様な見方から考え、自分なりの意見や問いを表現している。 ・自分の考えや気持ちが相手に分かりやすく伝わるよう工夫して表現している。
	③学びに向かう力	・世界の人々と協力しながら生きることに関心をもち、自分にできることを考えようとしている。 ・外国語を使ったやり取りを通して、相手に伝わることのよさを感じ、世界の人々と関わろうとしている。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）	【単元の意義】 本単元は、児童が世界の多様な文化や価値観に触れ、自分の生活や地域との関わりの中で考える力を養う単元である。児童は他者の視点に気付き、自分の「当たり前」を問い直す力を身に付けるとともに、世界の出来事や地域の課題を関連付けて捉え、主体的に考え判断する力を育むことができると考える。また、外国語を通して思いや考えを伝え合うことの意義や楽しさを実感し、コミュニケーションの重要性について考える機会となる。本単元は、世界と自分を結び付けて考え、他者とつながる力を育むことに価値のある単元である。 【児童観】 本学級の児童は、世界にはたくさんの国があることを知っており、様々な国々に興味をもっている。外国語活動にも積極的に取り組み、友達や教師と外国語を用いてやり取りをすることを楽しんでいる姿が多く見られる。一方で、なぜ外国語を学ぶのかについて自分なりの考えをもって学んでいる児童は未だ少ない。また、日本と世界とのつながりについて考える経験もあまりなく、外国で起こっていることを自分とは関係のない出来事だと捉えたり、自分たちの地域に住む外国人に対して距離を感じてしまったりする姿も見られる。だからこそ、世界で起こっている問題を知り、自分の地域の課題と結びつけながら解決策を考えるような学びが必要である。さらに、外国語によるコミュニケーションを通して、自分の言葉で考えや気持ちを伝え合うことのよさを実感することができるようにしたい。 【教材観】 本実践は、授業者自身がベトナム研修で見聞きした経験を基に構成している。実際に出会った人々とのやり取りや、現地で撮影した写真や動画を取り上げるのは、単なる知識の提示ではなく、そこで交わされた言葉や価値観の違いに触れることを重視しているからである。教材を通して児童が「外国は自分とは関係のない世界」ではなく、「自分の生活や地域とつながる世界」として捉えられるようにしたい。また、他者の視点に出会うことで、自分の中の「当たり前」を問い直すきっかけとなり、外国語によるコミュニケーションの必要性や意義を実感できる学びへとつなげたい。 【指導観】 指導に当たっては、児童が世界で起こっている出来事や課題を自分の生活や地域と関連付けて考えられるよう、学習の場を丁寧に設定する。児童にとって分かりやすい写真や動画、現地の人々の声などを通して異文化や外国語でのコミュニケーションに触れ、自ら疑問をもち意見を出し合う機会をもつ。また、生活様式や価値観の違いに着目して考える機会や、自分たちの地域の課題と世界の事象を比較しながら解決策を考える場を設けることで、児童が主体的に思考し判断する力を育む。さらに、外国語による表現活動や実際の文化交流を通して、自分の考えや思いを相手に伝え、相手の言葉を受け止める体験を重ねられるよう支援する。こうした学習活動を通して、児童が外国語を単なる学習の対象としてではなく、自分や社会とつながる手段として理解できるよう働きかけ、他者の視点に出会いながら自分の考えを広げ、問い直す力を育むことを目指す。

7. 単元計画（全７時間）

時	ねらい	学習活動	資料など
1	○ベトナムってどんな国？（外国語活動） ・異文化への関心を高め、他者の生活や価値観に気付く力を育てる。	・現地での生活や出会った人々、驚いた出来事について教師の話を聞き、疑問や気づきを共有する。外国語でのやり取りの音声を聞き、会話の大まかな内容をつかむ。	・ベトナムの写真・動画 ・現地でのやり取りを収めた音声
2	○ベトナムと日本の関係は？（総合的な学習の時間） ・ベトナムと日本が助け合っていることを知り、国同士の関わりについて理解する。	ベトナムが日本に支援したこと、日本がベトナムに支援したこと、JICA の取り組みの事例を知る。	・「JICA の活動について」JICA ホームページ参照 ・現地でのインタビュー
3	○ベトナム戦争はどんな戦争だったの？（国語科） ・戦争の歴史に触れ、世界にもたくさんの被害があったこと、苦しんだ人々がいたことを知る。	・ベトナム戦争の事例を通して、日本のみにとどまらない戦争の影響、苦しんだ人々について知る。	・ベトナム戦争に関する資料や写真 ・ホアロー収容所で見学したこと ・絵本『ちいちゃんのかげおくり』
4 本時	○「あたりまえ」を比べてみよう（総合的な学習の時間） ・国や地域によって生活や大切にしていること、考え方が違うことに気付く。	・ベトナムと日本の生活の違いを比べ、その理由を考える。 ・日本とベトナムの当たり前を比べ、人々の価値観の違いについて考える。	・現地での写真や動画 ・ダナン病院で見学したこと ・佐賀市内の様子
5	○佐賀市の課題について考えよう（総合的な学習の時間） ・自分の地域の問題と他の国の様子を比べ、課題解決に向けて自分の考えをもつ。	・ベトナムの交通状況と佐賀市の交通事故の状況を比較し、共通点や違いを見つけて解決策を考える。	・現地での写真・動画 ・佐賀市の交通事故データ ・佐賀市の交通安全の取り組みに関する資料
6	○世界の人と交流しよう（外国語 活動） ・外国語によるコミュニケーション の楽しさや文化の違いに気付く。	・交流することを通して、互いの文化や生活について理解を深める。	
7	○どうして外国語を勉強するの？（外国語活動） 「What do you like?」 ・外国語を使う楽しさや意味について考え、自分の言葉で伝えることへの意欲を高める。	・外国語によるコミュニケーションを通して、自分の考えや気持ちを伝え合う。 ・外国語を学ぶ意味について自分なりの考えをもつ。	・これまでの学習を振り返るワークシート

8. 本時の展開（概略）
本時のねらい：世界と自分のつながりを意識して身近な事柄を捉え直し、多様な価値や考え方に気付くことができるようにする。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点	資料（教材）
導入 （10 分） 展開 （30 分）	1　写真を見て、気付いたことを話し合う。 (1) どの国のどんな場面かを想像する。 「これは日本とベトナム、どちらの写真かな？」 「何をしているのかな？」 「どんな声が聞こえてきそう？」 「どうしてそう考えたの？」 (2) 考えたことや感じたこと、疑問を抱いたこととその理由を伝え合う。	・児童がイメージを広げ、比較する視点をもちやすくするために、ベトナム現地や佐賀市内の写真、動画を提示する。 ・どちらかが優れている（劣っている）といった一面的な比較に偏らないように指導する。 ・自分とは違う見方や考え方に気付くことができるようにするために、自分の考えに至った理由を尋ねる。	・ベトナムの写真・動画 ・佐賀市内の写真 ・学校での生活の様子が分かる写真
	自分と世界の「あたりまえ」をくらべてみよう		
	2　街の様子、人々の生活が分かる写真を比較し、違いから見つけた問題点について話し合う。 (1) 写真を見て気付いたことを伝え合う。 「どんな問題が見つかるかな？」 「街の人は困っているかもしれないね」 「それはどうすれば解決できるの？」 「それは本当に問題なのかな？」 (2) 日本とベトナムの共通点や相違点から、それぞれのよさを考える。 「全然違う？それぞれどんなよさがあるか考えてみよう」 「同じところもたくさんあるね。どうして同じなんだろう？」 (3) 自分の「当たり前」と世界の「当たり前」について考えたことを話し合う。 3　本時の学習を振り返る。	・児童が「人々が困っていない」ことを「配慮が必要ない」と誤解しないよう、人々の支え合いの背景や価値観に触れながら伝える。 ・本時までに学んできた「福祉」「みんなの幸せを守るまちづくり」の視点から、街の様子や人々の生活を見つめるよう伝える。 ・児童が自由に意見を出し合えるよう、多様な考えを受け止める。 ・どちらかが正解ではないということに気付くことができるよう、様々な視点で両国のよさについて取り上げる。 ・「当たり前」について、それぞれの児童の考えを認める言葉かけをする。 ・児童が考えを整理し、言語化することができるようにするために、児童	

まとめ （5分）	「今日考えたことはどんなこと？」 「“当たり前”を比べてみて気付いたことは？」	と共に本時のキーワードを決め、振り返りの際の視点とする。	

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）
写真から得た情報を基に、自分の感じたそれぞれの国のもつよさや課題を友達に伝えたり、友達の意見と比べたりして、自分の考えを広げている。（発言、ノートの記述）

10. 学習方法および外部との連携
・海外の学校とのオンライン交流会

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み
・JICA 九州（JICA デスク佐賀）交流会において県内の先生方へ発信
・校内での授業実践公開

【自己評価】

12. 成果	本実践では、写真や動画、現地でのエピソードを通しベトナム研修での実体験を授業化した。教師の話や外国の人々の言葉を「遠い国のこと」として受け取るだけでなく、日本や自分たちの生活と関連付けて捉え直す児童の姿が見られた。特に日本と世界の生活の違いや共通点を比較する活動では、日本の当たり前が世界の当たり前ではないこと、違いの中にもそれぞれのよさがあることに気付く様子が見られ、他者の視点に立って考えようとする態度の育成につながった。また、外国語活動と総合的な学習の時間を関連付けることで、外国語を学ぶ意義を「世界の人とつながるための手段」として実感をもって捉える児童も増えた。本実践は、世界と日本のつながりを意識し、多様な価値観を尊重しながら考える力を育む点において、重要な機会になったと考える。
13. 課題	授業者自身の体験をもとにした教材構成であったため、提示するエピソードや視点が限定的になり、ベトナムの多様な実情を十分に扱うことができなかった。児童の中には、提示された事例を「ベトナムの全体の姿」と一般化して捉えようとする様子も見られ、単一の事例から文化や社会全体を判断してしまう危うさがあった。また、「大変そう。」「困っていそう。」という見方が先行し、無意識のうちに日本の価値観を基準とした比較に偏る場面もあった。違いに気付くことはできていても、その背景にある歴史や社会的条件まで踏み込んで考えることは児童にとって難しい場面もあり、その点では表面的な理解にとどまってしまう児童もいた。
14. 改善点	単一の体験に依拠した教材構成から脱却し、複数の資料や視点を組み合わせた多面的な教材提示を工夫する必要がある。例えば、ベトナムの異なる地域や世代の人々の声を取り上げることで、「一つの国の中にも多様な姿がある」ということに気付かせ、ステレオタイプ的な理解を防ぐことができると考える。また、日本の視点だけで比較するのではなく、「なぜそのような生活様式や価値観が生まれたのか」という背景に目を向けさせる発問や資料提示のしかたを工夫し、文化や社会を文脈の中で捉える力を育てたい。

15.　学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	 ・日本の得意なことと、世界の得意なことがある。 ・日本人は優しいと思っていたけど、ベトナムの人も優しい。優しさは世界共通かもしれない。 ・日本では誰かを助けたり譲ったりすると「すごい！」と言われるけど、ベトナムではそれが普通なのかもしれない。それもすごくすてき。 ・そこで育った人はそれが当たり前になるから、いろんな国の当たり前は違うんだと思う。 ・英語を勉強したら一緒にいいアイディアを出すために話し合えると思う。
16.　授業者による自由記述	本実践は、教師海外研修で得た体験を生かし、国際理解教育を「世界と自分をつなげて考える学び」として構成した点に意義があると感じている。実践を通して、異文化への関心を高めるとともに、自分の当たり前を問い直す児童の姿が見られた。今後は多様な資料を活用し、より多面的に世界を捉える学びへと発展させていきたい。

参考資料：

・JICA ホームページ
・国際理解教育実践資料集（2025 年・JICA）
・国際協力ってなんだ？（2025 年・大河原誠也・ちくま書房）
・佐賀県警察本部ホームページ
・ちいちゃんのかげおくり（1982 年・あまんきみこ・あかね書房）
・つながる世界と日本（2025 年・JICA）

【実践者】

授業者氏名	小川　光洋	学校名	長崎県立島原特別支援学校
教科（科目）・領域	総合的な探究の時間及び家庭科	対象学年（人数）	高等部 3 年（18 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2025 年 9 月～11 月（8 時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：踏み出そう、世界への第一歩

2. 実践する教科・領域：総合的な探究の時間及び家庭科

3. 学習領域

	1	2	3	4
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
B グローバル社会	相互依存	情報化		
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：
○日本とベトナムの生活や文化の違いを理解する。(知識及び技能)
○日本とベトナムの生活や文化についての同一や違いを知り、その内容を生徒どうしでまとめて表現する。(思考力・判断力・表現力等)
○日本とベトナムの生活や文化について調べてまとめた内容や感想、気付きを発表することができる。
（学びに向かう力、人間性等）

5. 単元の評価規準	①知識及び技能	日本とベトナムの生活や文化の違いについて、写真や動画、教師の体験談などを基に、ワークシートに要点をまとめることができている
	②思考力、判断力、表現力等	日本とベトナムの生活や文化に関連する写真や動画から類似点や相違点に気付き、グループでの活動の中で意見を出し合ったり、まとめて発表するなど自分の考えを表現したりしている。
	③学びに向かう力、人間性等	日本とベトナムの生活や文化に興味を持ち、グループでの活動や発表に進んで取り組もうとしている。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】
昨今、生徒たちが住む島原半島においても、観光やビジネス、技能実習生といった様々な形で、多くの外国人が実際に生活をしている現状がある。生徒たちが、触れようと思えば触れられるほどの身近なところに外国人や外国の文化がある。本単元において、教師が提示するベトナムに関する写真や動画、実体験に触れながら、日本とベトナムの生活や文化、そこで暮らす人々について類似点や相違点を見付け、外国の生活や文化、人々の考え方や価値観の違いを理解し、異文化に関心をもって、そのよさを受け入れることで、国際理解につなげていくことをねらいとしている。

【児童／生徒観】
本グループの生徒は、高等部3年生18名（男子9名、女子9名）で構成されており、知的障害を主として、自閉症スペクトラム障害、視覚障害など生徒の実態としては多岐にわたっている。高等部入学後、多文化共生や国際理解等の関連する内容の学習については未学習であり、前述したとおり、自分たちの身近な環境に外国人との関わりや外国の文化に触れる機会はあり、生徒たちもそのことを認識はしているものの、本学年の生徒たちに多く見られる「自信のなさ」や「経験がない故の不安感」からか、なかなか関わりの一歩を踏み出せずにいるのが実情である。本格的に本単元の学習に入る前に、教師が学習の概要を説明した際には、学習内容に対して、興味関心がある態度が見られたことから、本単元での学びが生徒たちの「一歩を踏み出す勇気」の手助けになればと考えている。

【教材観】
本単元では、日本と外国の生活や文化、特にベトナムに特化して学習に取り組む。生徒の日頃の外国人や外国の文化への関わりに目を向けてみると、生徒たちが住む島原半島がユネスコの世界ジオパークに認定さていることもあり、温泉や湧水を中心とした観光資源に恵まれ、海外から多くの観光客が訪れ、技能実習生が地域の産業の担い手として活躍している。生徒たちも外国人が行きかう光景を比較的身近に見かける日常として認識している。本学年のほとんどの生徒が地元での就労及び生活を希望し、そのなかでも数名の生徒が一般就労を希望しており、就労先によっては海外からの技能実習生と仕事を共にすることも十分に考えられる。また、生活していく中で外国人や外国の文化に触れる機会もあると考えられる。本単元の学習を経て、あらためて日本の良さに気付き、故郷を愛する心を育むとともに、異国の生活や文化に触れてその違いを知り、理解し、その良さを受け入れることで、自ら外国の人々と関わり、外国の文化に触れてみようという意欲を育むことができるのではないかと考える。

【指導観】
指導に当たっては、生徒は11月下旬に眉峰祭が控えており、そこで1学期に学習したSDGsをテーマにした学習内容とともに、本単元で学習する日本とベトナムの「生活」「文化」「食」、それぞれの「良さ」や「違い」等についてワークシートにまとめながらグループで発表ができるように指導をしていく。指導の中で、ベトナム研修の際に撮影した写真を用いて、生徒自身にそれぞれ1枚の写真から何が読み取れるかを問い掛け、生徒一人一人の気付きや考えを導き出す場面を設定していく。また、発表に必要な資料作成にはタブレットPCを活用する。グループでの学習活動の中で、生徒一人一人に役割を持たせながら、お互いを尊重し、協力して学習目標を達成することで、「達成感」や「自己肯定感」が高まるような指導を行っていく。

7. 単元計画（全8時間）

時	ねらい	学習活動	資料など
事前	これからの学習内容の確認と海外の人々の生活や文化に関心を持たせる。	・世界地図の中からベトナムの位置を確認する。 ・教師海外研修で撮影した写真や動画を見ながらベトナムがどんな国かをイメージする。	・世界地図 ・教師海外研修で撮影した写真、動画

		・眉峰祭に向けて、これからの活動について確認する。	
1	日本と比較しながら、ベトナムがどんな国か、ベトナムで生きる人々について知る。 長崎県や島原半島とベトナムの関わりについて知る。	・日本、東南アジアの地図の中からベトナムの位置を確認し、地図上に色付けする。 ・日本とベトナムについて、「面積」「人口」「首都」などの８項目について、タブレット PC を用いて調べ、ワークシートに記入する。 ・長崎県内にどの国の人々が住んでいるのか、どの国の人々が多いのか、島原半島にはベトナム人がどのくらい住んでいるのか、タブレット PC を用いて調べ、ワークシートに記入する。	・日本、東南アジアの地図 ・教師海外研修で撮影した写真 ・ワークシート
2-4	日本人とベトナム人の考え方、価値観の違い知る。 日本とベトナムの生活や文化の違いを見つける。	・「しあわせを感じるとき」「自分にとって大切なもの」について考え、ワークシートに記入し、ベトナム人との考え方と比較する。 ・二つのグループに分かれ、それぞれ日本やベトナムの「生活」「文化」に関して、教師から提示された写真から気付いたことをワークシートに書き出す。 ・グループごとに発表し、意見交換をする。 ・眉峰祭の発表資料としてまとめる。 ・次回の学習内容についての予告。	・教師海外研修で 撮影した写真や動画 ・日本の生活や文 化に関する写真や動画 ・ワークシート
5-6 本時	日本とベトナム の食文化の違い を体験する。	・2 つのグループに分かれ、それぞれ「島原そうめん」「フォー」を調理する。 ・それぞれの料理を食べてみて、類似点、相違点など気付いたことをワークシートに記入する。	・調理に使用する食材 ・調理の手順を示 した資料 ・ワークシート
7 本時	調べたこと、気付いたことをまとめる。	・これまでの学習内容を振り返る。 ・これまで学習した日本とベトナムの「生活」「文化」についてグループごとにまとめる。	・これまでの学習 内容を表す写真や動画 ・ワークシート
8	まとめたことを発表する。	・眉峰祭にて、日本とベトナムの「生活」「文化」について生徒たちが調べたことについて発表をする。	

8. 本時の展開（概略）
本時のねらい：日本とベトナムの食を体験し、見た目、味、材料などの類似点や相違点に気付き、その気付きや一つ一つの料理に関する背景などをまとめることができる。

過程・時間	教師の働き掛け・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入（40 分）	・本時の学習内容および目標について確認する。 ・「島原そうめん」と「フォー」を調理することを提示する。 ・それぞれの料理や使用する食材について、その背景などを説明する。 ・それぞれの調理グループを発表し、調理における注意事項を確認する。 ・2 つの調理グループに分かれる。 ・役割分担表を用いて、グループごとに役割分担を決める。 ・一旦 10 分間の休憩に入り、調理実習室に移動する。	・スライドや資料を用いて、本時の学習内容および目標を明確する。 ・スライドや資料を用いて、調理実習を行う上での注意事項を確認する。	・TV ・AppleTV ・iPad ・本時の学習内容および目標を示したスライド並びに資料、ワークシート ・グループ一覧 ・役割分担表 ・調理実習中の注意事項を示したスライドおよび資料
展開（90 分）	・それぞれ 2 つのグループが「島原そうめん」「フォー」を担当して調理する。 ・調理した「島原そうめん」「フォー」を全員で試食する。 ・後片付けをする。	・調理の手順を随時確認できるように、調理の手順を示した資料を準備する。 ・生徒の実態に応じて役割分担を明確にしておく。 ・安全面に考慮し、教師と確認しながら調理を行う。	・調理の手順を示した資料 ・調理に使用する食材。※一部レトルト食品を使用する
まとめ（30 分）	・日本の料理「島原そうめん」とベトナムの料理「フォー」を比較して、類似点や相違点など気付いたことをワークシートにまとめる。 ・グループごとにまとめたことを発表する。	・生徒の活動の様子を観察し、必要に応じて着目してほしいポイントなどヒントを与える。	・振り返り用のワークシート

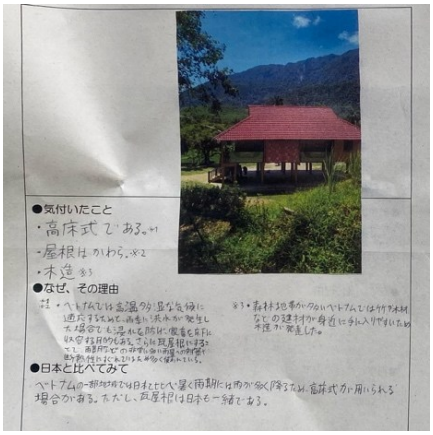
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）
調理への取組の様子、発言、ワークシート

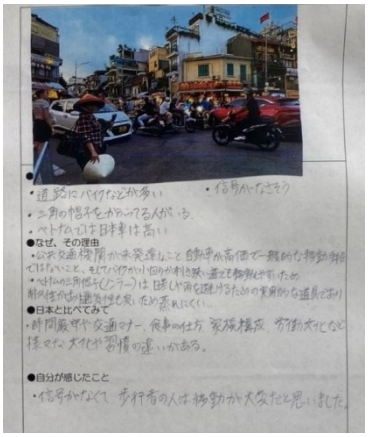
10. 学習方法および外部との連携 ・JICA 九州スタッフ、NPO 九州海外協力協会スタッフの方から授業参観した感想を伝えていただくことで、生徒たちの達成感や自己肯定感を高める。 ・12 月中旬に、留学を経験した現役大学生にゲストティーチャーとして来校していただき、それぞれの留学先での「生活」「文化」「現地の人々」について授業を現在計画中。
11. 学校内外で国際理解教育/開発教育を広める取り組み ・眉峰祭において学習内容のステージ発表および校内掲示。

【自己評価】

12. 成果	全体で 8 時間という限られた時数の中で、ベトナムという国、人々、文化や習慣等について日本と比較しながら学習を行い、生徒たちから「もっとベトナムの歴史や文化について調べてみたい。」「フォーだけでなく他の料理も作ってみたい。」「ベトナムの人々の明るさや前向きな考え方に自分もそうでありたいと思った。」「ベトナムのことが好きになりました。」等の発言を引き出すことができたことは、外国の人々や文化に触れる機会が身近にあるにもかかわらず、一歩を踏み出す勇気がなかった生徒たちにとって、その一歩を踏み出すきっかけづくりになったのではと考える。
13. 課題	授業の対象となる生徒の実態に応じて、教材、内容、課題等を設定することの重要性を強く感じた。特に「1 枚の写真から自分の気付きや感じたことを書き出す学習」においては、学習内容そのものが生徒たちにとって難しく、生徒たちの「気付き」「感じたこと」が教師の意図した「気付き」「感じたこと」とかけ離れている場面も見られ、写真教材の選定の工夫や気付いてほしい、感じてほしいポイントについて説明する等の手立てがもっと必要だったのではと考える。
14. 改善点	前述した通り、対象となる生徒の実態に応じた教材、内容、課題等を設定する。特別支援学校の授業形態の特性を生かして、生徒の実態に応じて学習目標を設定して、目標に応じて学習グループを設定することも、生徒が目標を達成するための一つの方法ではと考える。 どのような状況においても、生徒一人一人の実態を把握した上で、ICT 機器等もうまく活用しながら、生徒自身で調べたこと、気づいたこと、感じたことをまとめさせ、お互いのまとめた内容を共有しながら、生徒たちみんなが「わかる授業」「達成感の得られる授業」に今後発展させたいと考える。
15. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	今回の学習は、全 8 時間「ベトナムがどこにあるのか？」という日本との位置関係を知る学習から始まり、様々な面からの日本とベトナムの比較、ベトナムの人々、国民性、文化、習慣等について学習し、最後に眉峰祭において学習した内容を全校生徒、保護者、地域の方々に発表するという流れで実施した。

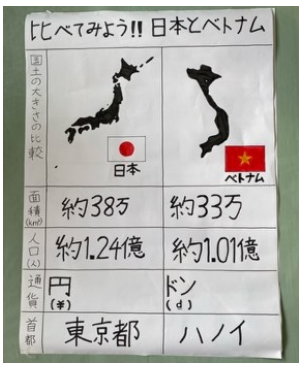
○日本とベトナムの人々、生活、文化についての学習の様子

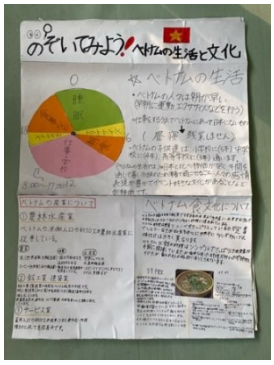




○日本とベトナムの食文化、島原そうめんとフォーの調理実習の様子

○眉峰祭での発表の様子および掲示物





16. 授業者 による 自由記述	今回の教師海外研修に参加するに当たって、ベトナムという国が、戦争と戦争からの復興という点については、日本と重なる部分があり、戦争の悲惨さや平和教育等を中心に授業実践ができればと考えていたが、実際にフランスの植民地時代からのベトナムという国の成り立ち、歴史、戦争に触れた時に、想像以上の内容の重さに、正しく伝えることの難しさを痛感した。今の生徒たちの実態を考えた時に、そのような「負」の部分ではなく、ベトナムという国、人々、文化や習慣に触れることで、異国を知る、異国に興味をもたせるような学習の方が良いのではという考えに至った。結果的に生徒たちが異国の人々や文化等に興味をもつきっかけ作りになったことは良かったと感じている。 今回の教師海外研修を経て、「自分に何ができるのか」ということを考えることが多くなった。今回の経験をどう生徒たちに伝えていくか、一人でも多く国際理解教育や開発教育に興味、関心をもてる人材を育てられるかといったことを考えながら、自分自身与えられた環境の中で精一杯取り組んでいければと考える。 改めて、今回自分自身がこのような貴重な経験を得られたことに対し、JICA 九州、研修を共にした職員及び参加教員の皆さんには感謝申し上げたい。

【実践者】

授業者氏名	鳥江　太介	学校名	熊本県立熊本農業高等学校
教科（科目）・領域	農業（農業と環境）	対象学年（人数）	1 年　農業経済科（41 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2025 年 10 月　～　2025 年 12 月（13 時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：これからの社会と農業・農村

2. 実践する教科・領域：
農業（農業と環境、
総合実習）

3. 学習領域

	1	2	3	4
A多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
Bグローバル社会	相互依存	情報化		
C地球的課題	人権	環境	平和	開発
D未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：
外国の農業や食文化を起点に、環境・文化・歴史・教育・SDGs などを多面的に理解する。
フォトランゲージや調べ学習を通じて問いを立て、自ら考える探究的な学習態度を育成する。
栽培・交流体験を通じて、農業・食料生産と社会のつながりを実感する。
「豊かさ」「幸せ」とは何かを考え、自らの生き方や社会のあり方に目を向ける。

5. 単元の評価規準		
	①知識及び技能（技術）	外国の農業・環境・文化について学習内容を正確に理解・整理できる。これまでの栽培学習で得た知識・技術を活動に活かしている。
	②思考力、判断力、表現力等	写真や調べ学習をもとに問いを設定し、情報を比較・分析し、班の意見として表現できる。発表において「豊かさ」「幸せ」と社会・農業を関連づけて考察できる。
	③学びに向かう力	フォトランゲージや調べ学習、実習に積極的に参加し、異文化や社会課題を自分ごととして捉えようとする。振り返りで今後の生き方に結び付けて考えている。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】
生徒は教材を通じて「世界と自分」をつなげて考えるきっかけを得る。「農業と環境」の枠を超え、社会・文化・歴史・環境問題を多面的に学び、最終課題「豊かさとは」「幸せとは」を心に残すことで、持続可能な社会を考え続ける態度を育む。

【生徒観】
生徒は社会や世界に関心を持ち始めているが、その理解はまだ断片的である。自分の生活と「世界の農業や食料、環境」とのつながりを実感する経験が少ない。グループ活動や体験活動を通じて主体的に関わることで、持続可能な社会や農業のあり方を考える力を育むことが期待できる。

	【教材観】 フォトランゲージは直感的な気づきと問いの出発点となる。栽培体験は輸入・地産地消・環境負荷などを考える手がかりとなる。ベトナム人講師との交流は異文化理解や持続可能な社会を考える実践的学習機会である。「豊かさ」という問いは、学びを社会と自分自身に結び付ける根幹の教材となる。 【指導観】 生徒が主体的に気づき・考え・行動するプロセスを重視する。教師は問いを引き出し、学びを統合する役割を担う。学びをジブンゴト化【自分自身の課題として捉えること】し、生徒が持続的に考え続けることをめざす。

7. 単元計画（全 13 時間）

時	ねらい	学習活動	資料など
1,2	これからの社会と農業の関係を考える。	教科書、グラフ、表を用いて意見交換し、これからの社会のあり方と農業について考える。 1 農業とエネルギー 2 これからの農業・農村 3 持続可能な農業の維持と発展 4 環境保全と農業 5 農業・農村をとりまく課題 6 都市と農村の共生と対流 7 私たちのなすべきこと	教科書「農業と環境」 （実教出版） P74-88
3,4	日本とベトナムとの関係について理解し、文化や農業、食のつながりや違いに気づく。	1 ベトナムクイズ 2 ベトナム研修の報告を聞き、気づきを得る 3 気づきの共有（発表）	Chromebook
5,6 本時	ベトナムの歴史や枯葉剤について理解する。	1 フォトランゲージ(気づきの共有、班発表) ・枯葉剤とは何か？使われた背景を知る。 ・現在も影響があることを理解する。 ・私たちが住む地域を振り返る。	ベトナム戦争・枯葉剤被害の写真 模造紙、付箋
7,8 本時	「豊かさ」と何か考える。	1 豊かさとは？ ・自身の考える豊かさとは何か。 ・ベトナムの少数民族の方にとっての豊かさとは何か。 ・地域や立場によって豊かさが変化することを理解する。 2 技能実習生とは？ ・制度や SDGs との関連を学び、DEAR（認定特定非営利活動法人開発教育協会）の資料をもとに理解を深める。 ・地域の技能実習生や農業の課題について深める。	「豊かさと開発 Development for the Future」 （認定特定非営利活動法人 開発教育協会 (DEAR)）

9,10	栽培体験から農業と社会のつながりを考える。食を生み出す体験を通じて、自分の生活や社会との関わりを考える。	1 ベトナム野菜（パクチー、ノコギリコリアンダー）の水耕栽培・観察・記録 2 ベトナム料理・食文化調べ 3 交流内容の検討 4 準備（進行、掲示など）	ペットボトル、パクチー種子、ノコギリコリアンダー種子、栽培記録用紙
11, 12	異文化交流を通じて理解を深める。	1 栽培した野菜でベトナム人講師と料理教室 2 ベトナム料理や文化の紹介、交流、質疑 ※食材や食文化の背景について理解を深める	収穫野菜、ベトナム食材、講師謝礼 感想・振り返りシート
13	学びを総括し、自分の生き方へつなげる。	ワークシートで振り返り。全体で共有。	ワークシート

8. 本時の展開（概略）
本時のねらい：写真から気づきを得て、班で意見をまとめ発表する。また、豊かさとは何か考え、国や地域などによって変化することを理解する。ベトナム人技能実習生について理解を深め、自分ごととして考えることできる。

過程・ 時間	教師の働きかけ・発問および 学習活動	指導上の留意点 （支援）	資料（教材）
導入 （10 分） 展開 （180 分）	ベトナムクイズ・報告を振り返る。前時までに学習したベトナムクイズや研修報告を振り返り、日本とベトナムとの関わりや、生徒自身が感じた疑問・印象を共有する。本時では、写真を手がかりに、ベトナムの歴史や社会背景に目を向け、「豊かさ」とは何かを多面的に考えることを確認する。 (1)フォトランゲージ活動（気づきの記録） ①課題写真を提示 ②フォトランゲージ ③付箋に気づきを記入・共有編集 ④模造紙で整理 ⑤班発表（気づき） ⑥教師補足（写真の背景を説明） (2) 豊かさについて考える ①自身の考える豊かさとは何か。 ②ベトナムの少数民族の方にとっての豊かさとは何か。 ・国や地域などによって変化することを理解する。	Chromebook で共有 役割分担「記録係・発表係・まとめ係」 生徒が安心して発言できる雰囲気作り。 生徒が自分の生活と関連づけて考えるよう促す。 写真から受けた印象を否定せず、どの意見も価値ある気づきとして扱う。歴史的背景（戦争・貧困）については、過度な価値判断を避け、事実と問いを区別して扱う。	Chromebook モニター 写真,模造紙,付箋 JICA 資料 ワークシート「豊かさと開発 Development for the Future」（認定特定非営利活動法人開発教育協会（DEAR)）

まとめ (10 分)	(3)技能実習生制度について理解を深め、自分ごととして捉える。 〇振り返り（ワークシートに記入）	技能実習生の話題では「かわいそう」で終わらせず、日本社会との関係に視点を広げる。	

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）
①知識・技術：ベトナムをはじめ外国の農業・環境・文化について正確に理解・整理できている。
②思考・判断・表現：写真や学習をもとに気付きを得て、班の意見としてまとめ、表現できる。日本と世界が抱える課題とそのつながりを考えることができる。
③主体的に学ぶ態度：フォトランゲージに積極的に参加し、異文化や社会課題をジブンゴトとして考えようとしている。

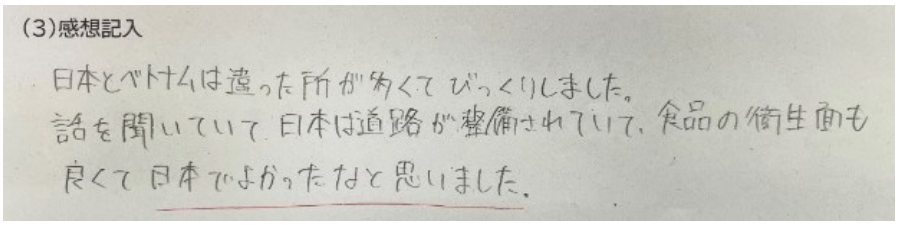
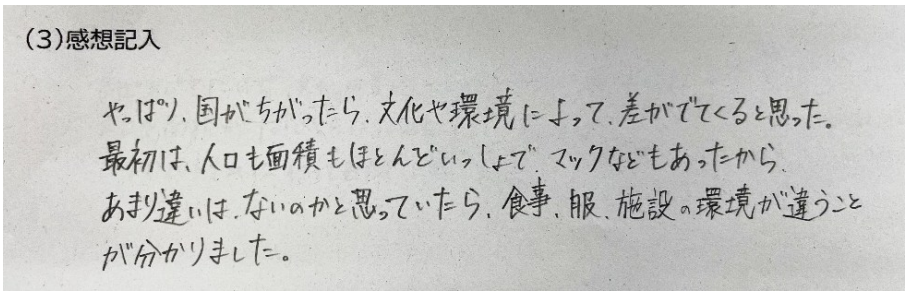
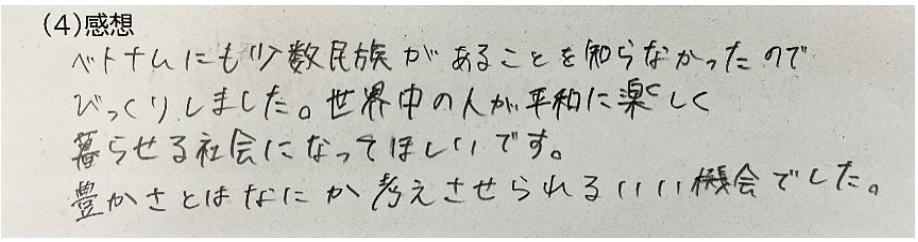
10. 学習方法および外部との連携
熊本市国際交流振興事業団、在熊本ベトナム人協会と連携し、ベトナム人講師による料理教室と交流活動を実施。生徒が異文化を身近に感じ、農業や食を通じた国際的なつながりを実感する機会となった。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み
・JICA 熊本デスクと連携し関係者への報告を実施
・地元新聞社や学校広報誌、学校ホームページを通じて、授業実践や生徒の学びを発信
・校内研修や教員学習会で共有
・地元農家や地域企業と連携し、外国人労働者と農業の関係をテーマにした意見交換や講話の機会を設ける。

【自己評価】

12. 成果	生徒一人ひとりの「気づく → 考える → 行動する」という変化を促すため、複数回の授業を段階的に実施した。まずはベトナムについてクイズ形式で導入し、興味関心を高めた。初めのうちは日本との共通点や違いに目を向ける生徒が多く、「日本に生まれてよかった」という感想で終える生徒も見られた。 次の段階では、枯葉剤やベトナム戦争に関する写真を用いてフォトランゲージを行い、国の成り立ちや歴史的背景に触れさせた。これにより、生徒たちは表面的な理解から徐々に深い理解へと進んでいった。さらに「豊かさ」について、自分自身の認識と少数民族の豊かさ・幸せを比較しながら想像する過程を通して、国や立場によって豊かさの捉え方が異なることを理解することができた。 著しい経済発展と日本との関わり、そしてその裏側にある「陰と陽」について学びを深める中で、日本が抱える食料自給率の低迷や農業従事者の減少といった課題を背景に、外国人技能実習制度が導入され、多くの外国人が来日していることも知った。特に県内ではベトナム人が最も多いこと、また技能実習生が抱える課題についても理解を深めたことで、「自分だったらどうするか。」という視点でジブンゴトとして考える生徒が増えていった。 最終段階として、水耕栽培でパクチーを育て、在熊本ベトナム人協会の講師を招いてベトナム料理の調理実習と交流会を実施した。ベトナム人と直接関わる機会は多くの生徒にとって初体験であり、料理や食文化を五感で味わうことで、より実感を伴った理解につながったと考えられる。今回

	の授業実践を通して、生徒たちがベトナムの経済発展の光と影を知り、それが私たちの食や暮らしと密接に結びついていることに気づけたことは、大きな成果である。
13. 課題	事前に授業構想をある程度考えてはいたものの、実際にベトナムを訪問すると想像以上に多くの刺激があり、教材として何を活用するか非常に迷った。当初は、生徒にあれもこれも伝えたいという思いから内容を詰め込みすぎた指導案になっていた。しかし、帰国後研修で飯塚市立穂波東中学校長猿渡氏から「テーマを絞った方がよい」とご助言をいただき、「食文化」「豊かさ」「ベトナムから知る日本の課題」の三つに絞り込むことができた。
14. 改善点	生徒が段階的に理解を深め、自ら気づきを得られるようにするためには、複数回の授業が必要であった。海外研修後、2 学期に内容を詰め込んだため、年間計画との調整が難しく、授業がタイトになってしまった。そこで当初から 2 学期に取り組む予定であった野菜栽培・流通・環境問題などの農業の学習内容に、ベトナムに関する授業を組み合わせることで、今回の指導計画を成立させた形である。来年度以降は、より計画的に組み合わせることで、年間を通した授業展開も可能になると考えている。また、10 月からパクチー栽培に取り組んだが、気候や適温の違いにより予想以上に発芽が遅れ、最終的には農家の方から分けていただいたパクチーを調理実習で使用することとなった。次年度以降は、春から夏にかけて栽培を行うことで、生徒自身の栽培を通した学びをより深められると考えている。

15. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	○ベトナムクイズやベトナム紹介後の感想  (3)感想記入 日本とベトナムは違った所が多くてびっくりしました。 話を聞いていて日本は道路が整備されていて、食品の衛生面も良くて日本でよかったなと思いました。  (3)感想記入 やっぱり、国がちがったら、文化や環境によって、差がでてくると思った。 最初は、人口も面積もほとんどいっしょで、マックなどもあったから、 あまり違いは、ないのかと思っていたら、食事、服、施設の環境が違うことが分かりました。 ○少数民族から豊かさを考える授業後の感想  (4)感想 ベトナムにも少数民族があることを知らなかったのでびっくりしました。世界中の人が平和に楽しく暮らせる社会になってほしいです。 豊かさとはなにか考えさせられるいい機会でした。

(4)感想
ベトナムと日本のかかえている問題は似ていて、若い人の農業離れや、村のかを他などが似ているなと思った。

(4)感想
生活している環境によって豊かだと感じることが違うところがあるんだなと思いました。でも、親が思う幸せは日本の親とあまり変わらないのかなと感じました。

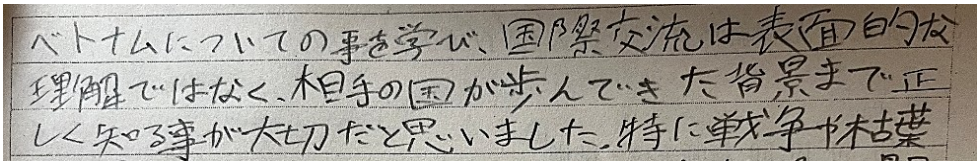
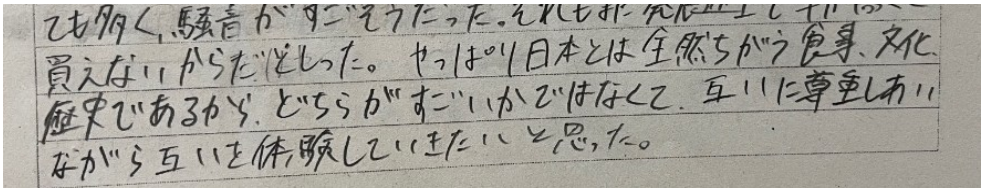
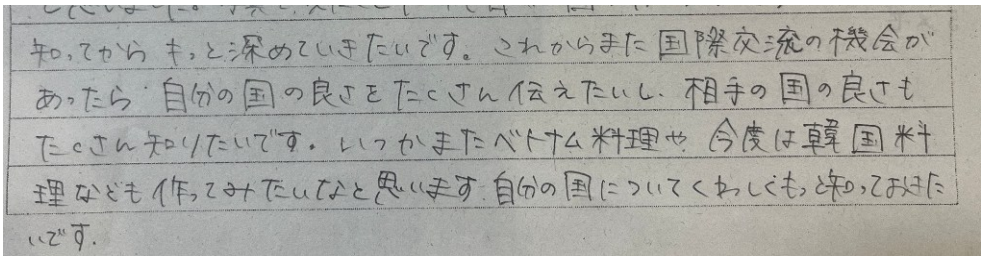
(4)感想
自分が考えた少数民族にとっての豊かさは全然違うものだったから少しおどろきました。そして、少数民族の人達は仲間と協力したり団結したり、自分の文化について誇りに思ってるところなど日本と似ているところもあり親近感がわいた。ベトナムの文化についてもっと知りたいと思った。

○国際交流授業の様子と感想

3カ国の国の交流で初めてベトナム料理を作りました。料理のみんなとそうじ。ないなどたくさんアイデアを出しあって完成させることができました。フォーは麺やお肉は上手に出来たけれど、スープでシナモンを入れすぎてすごい匂いになってしまったので食べるのに苦痛しました。あげはるまきは具材を細かくカットするのが難しかったです。あげはるまきはとてもおいしかったです。ベトナムの国の代表的な料理を食べることが出来てとてもいい思い出になりました。また、韓国の人は明日が最終日でそんな中で私たちと一緒に料理を作って一緒に食べて会話をしたりしていい機会だったなと思いました。これからも今日あったことを忘れずにそれぞれの国の良さなどをいろいろな国の人たちに伝え合いたいなと思います。

○全体の振り返り

今まで、他の国の人と関わることに少し抵抗がありました。
でも今回の授業を受けて、他の国の文化などをもっと知りたくなりました。
また、他の国の方達と関わる機会があれば、積極的に参加したいです。ベトナムについての授業をしてくださり、ありがとうございました。

	 ベトナムについての事を学び、国際交流は表面的な理解ではなく、相手の国が歩んできた背景まで正しく知る事が大切だと思いました。特に戦争が枯葉  でも多く、騒音がすごそうだった。それもまた[illegible]買えないからだとした。やっぱり日本とは全然ちがう食事、文化、歴史であるから、どちらがすごいかではなくて、互いに尊重しあいながら互いを体験していきたいと思った。  知ってからもっと深めていきたいです。これからまた国際交流の機会があったら、自分の国の良さをたくさん伝えたいし、相手の国の良さもたくさん知りたいです。いつかまたベトナム料理や今度は韓国料理なども作ってみたいなと思います。自分の国についてくわしくもっと知っておきたいです。
16. 授業者 による 自由記述	教師海外研修を通して、実際に五感で感じることの大切さや、経験が想像を大きく超えるものであることを実感した。その経験を生徒にも追体験してもらいたいと考えたが、様々な制約もあり、テーマを絞って取り組むことにした。生徒たちは当初、表面的な理解にとどまっていたものの、学びを深める中で、ベトナムの国民性や食文化には歴史的背景が深く関わっていることを理解していった。また、増加している技能実習生についても理解を深め、ベトナムをより深く知ったことで、生徒たちがジブンゴトとしての視点を得られたと捉えている。交流授業では、熊本市国際交流振興事業団に講師を紹介していただき実施したが、当日はベトナム人講師 2 名に加えて韓国からの大学生 2 名も参加し、充実した国際交流の場となった。ベトナム料理を初めて食べる生徒も多く、これまでの授業で得た気づきと併せ、五感を通して学ぶことで、ベトナムをより身近に感じられた様子であった。今回の一連の授業を通して、生徒たちは海外への関心を持ち始めている。次年度は食品流通や経済についての専門的な学習に移行するが、農産物や食料を通じた国際的なつながりや各国の背景や文化まで意識して学習に取り組めるよう指導していきたい。また、様々な国の方を招いた交流活動も実施したい。

参考資料：

・文部科学省 高等学校学習指導要領解説（農業編）

・実教出版『農業と環境』（教科書）

・写真資料、SDGs 関連教材、国別基礎データ（JICA 地球ひろば 国際理解教育・開発教育教材）

・「豊かさと開発 Development for the Future」（認定特定非営利活動法人 開発教育協会（DEAR））

・ベトナム基礎データ、日越関係資料（外務省）

・食料自給率、農業労働力に関する統計資料（農林水産省及び熊本県）

・多文化共生・国際交流事業資料（熊本市国際交流振興事業団）

【実践者】

授業者氏名	長﨑　雄史	学校名	小林市立　南小学校
教科（科目）・領域	道徳科・学級活動・生活科	対象学年（人数）	2年　1組（30名） 2年　2組（30名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2025年　10月　～　11月（7時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：ベトナムってどんな国？

2. 実践する教科・領域：
生活科・道徳科・学級活動を合わせての学習

3. 学習領域

	1	2	3	4
A多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
Bグローバル社会	相互依存	情報化		
C地球的課題	人権	環境	平和	開発
D未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：
ベトナムのことを知る活動や体験する活動を通して、ベトナムに暮らす人々の様子や文化などについて知り、ベトナムや自分が住む日本に対して親しみや愛情をもつ。

5. 単元の評価規準	①知識及び技能	・ベトナムという国が世界の中のどこにあって、日本とどのようなつながりがあるのかを知ることができる
	②思考力、判断力、表現力等	・ベトナムのものに触れたり、ベトナムの料理を食べたりすることで、日本とどのように違うのかを比べ、互いのよさについて考えることができる。
	③学びに向かう力	・ベトナムのくらしや文化に興味をもち、自分の考えや疑問をもって主体的に調べたり、友達と話し合ったりしながら、日本との共通点や違いを受け止め、互いの文化を尊重しようとすることができる。ベトナムという国のことを知ることで、そこに暮らす人々の様子に関心をもつことができる。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】
　近年、地域や学校にも外国につながりのある人が増え、子どもたちが異文化に触れる機会が広がっている。特に日本には多くのベトナム人が暮らしており、ベトナムの食べ物や遊び、生活の様子などを知ることは、児童にとって身近な国際理解教育の入り口となる。今回、教師海外研修に参加し、現地でベトナムの人々の暮らしや文化に直接触れた経験をもとに、その魅力や素晴らしさを児童に伝えることで、実感のある学びにつなげたい。また、小学校2年生の段階では「自分と違う生活や文化に出会うことで視野を広げ、互いを認め合う態度を養うこと」が大切である。生活科の「自分の生活や地域の人々の生活に関心をもつ」学習と結びつけて取り組むことで、児童が多様性を理解し、他者を尊重する心を育むことができる。

	【児童観】 ２年生の児童は、自分の生活と比べながら他の人の生活に関心をもち始める時期である。まだ抽象的な国際理解は難しいが、「食べ物」「遊び」「住まい」「言葉」など身近なテーマを取り上げることで、違いに気づいたり、共通点を見つけて喜んだりすることができる。また、友達と体験を共有することで学びを深め、異文化を「遠いもの」ではなく「自分につながるもの」と感じられる段階にある。 夏休み前に、教師海外研修でベトナムに行くことを伝えると、多くの児童が強い興味を示した。夏休み明けも「ベトナムの授業はまだですか？」と楽しみにする声が聞かれ、学習への期待の高さがうかがえる。ただ、小林市内では、テレビやインターネットを通じて外国文化に触れる機会はあるものの、直接体験する場は少ないのが現状である。実際に児童へアンケートを取ったところ、身近に外国人がいると答えた児童は２名のみだった。しかし、「ベトナムについて学びたい」と答えた児童は94%にのぼり、自分たちとは異なる文化を知りたいという意欲は非常に高い。 【教材観】 教師海外研修を通して、日本とベトナムの文化や生活を比べて考える中で、「何が正しいのか？」と問い直す場面が多くあった。初めはベトナムの文化に対して「どうして？」「それは違うのでは？」と思うこともあったが、背景を知ることで理解が深まり、「どちらが正しい。」と一方的に決められないことに気づいた。 この経験は、異文化を学ぶ際に大切な視点であり、児童にも「知る・体験する・考える」という学習活動を通して追体験させたい。また、ベトナムの食べ物や遊び、生活の様子など具体的で親しみやすい題材を取り上げることで、自分たちの生活を相対的に見つめ、多様な価値観に気づくきっかけとすることができる。 【指導観】 指導においては、知識を一方的に与えるのではなく、児童が自分の生活と結びつけながら「似ているところ・違うところ」に気づく活動を重視する。体験的な学び（料理を食べてみる、遊びを体験する、歌や言葉に触れるなど）を取り入れることで、児童が楽しみながら主体的に学べるようにする。また、学習の最後には「感じたこと・気づいたこと」を話し合い、「ちがっていてもいい」「いろいろな人と仲よくしたい」という国際理解の態度につなげていくことを目指す。 まず、ベトナムを「知る」段階では、ベトナムの写真や買ってきたものを提示することで、ベトナムの文化に触れさせる。ベトナムの生活や文化を伝える写真・映像・実物資料（衣服・お金・楽器など）を活用することで、児童の具体的なイメージを広げることができると考える。 次に、ベトナムを「体験する」段階では、南小校区にあるベトナムの物産店を訪問する。そこでは主に食べ物を扱っているため、ベトナムの食べ物はどういったものがあるのか理解させたい。ベトナム研修に行った際に、通訳のフィンさんという方に非常にお世話になった。この方の温かさが自分の中に残っており、児童にもこういう方と交流できたらいいと考えていたが、本店の店主のホァさんがまさにそのような方であった。ホァさんのお話を聞くこともできるということで、ベトナムの方の温かさに触れる機会にもした

	い。また、訪問した際にベトナムの食べ物であるフォーを購入する。学校で調理して食べることで、さらに食文化への理解が深まるようにする。 　ベトナムを「考える」段階では、まず、ベトナム戦争について取り上げる。今でも枯葉剤の影響で苦しんでいる方がいるが、力強く生きていることも伝えたい。その際、日本も歴史的に戦争の負の影響を受けていることについても考えさせたい。 　最後に、写真をもとにベトナムと日本の違いについて考えさせる。「どちらが正しいのか？」という問いを投げかけ、それぞれの国のよさがあり、それを認めていくことができるようにする。

7. 単元計画（全７時間）

時	ねらい	学習活動	資料など
１ 学活１	ベトナムについて知る。	○世界地図やベトナムの写真を見たり、ベトナムのお土産に触れたりすることで、ベトナムの人々の暮らしを知る。	ベトナムの写真・動画・服・帽子・楽器等
2-5 生活４	ベトナムを体験する。 1 ベトナム物産店に行って、ベトナム出身のホァさんの話を聞く。 2 ベトナム料理を作って食べる。	○南小校区にあるベトナムの物産店に行き、どのようなものが売っているのか知る。主に食べ物を中心に置いてあるため、食について考える。 ○また、ベトナム人である店主の話を聞く。その際、気になることを質問する。 ○ベトナム物産店で購入した「フォー」を作って食べる。その際、フランスや中国などの影響で「フォー」を食べるようになったことを説明し、「食」はその国の文化の形成に大きくかかわることが理解できるようにする。	ベトナム物産店 ゲストティーチャー ベトナム料理
6-7 道徳１ 道徳１ 本時	ベトナムについて考える。 1 平和の大切さについて考える。 2 日本と比べて考える。	○ベトナムも日本も、ベトナム戦争と太平洋戦争という悲しい歴史を乗り越えていることを知り、平和の大切さについて考える。 ○これまで学んできたベトナムのことと、自分たちが知る日本とを比べ、お互いの国のよさについて考える。	スライドショー ベトナムの写真 ベトナムが題材の絵本・ベトナムの写真

8. 本時の展開（概略）
本時のねらい：ベトナムと日本の文化を比べることで、どちらの文化にも背景があることを知り、親しみをもてるようにする。

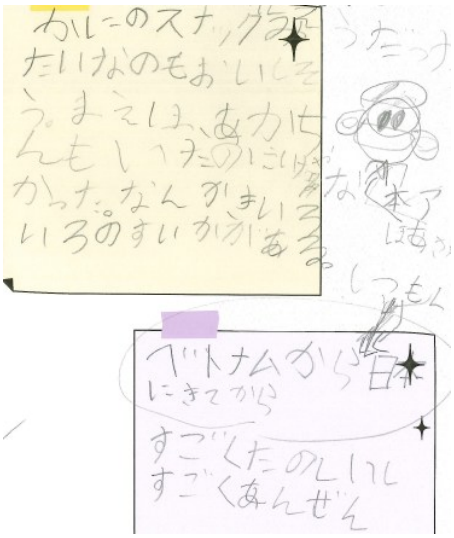
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入（7分）	1 絵本「ぼくはひとりで」の一枚の絵から、少年が何をしようとしているか考える。	○初めから絵本を読むのではなく、一枚の挿絵を提示することで問いをもって本時の学習に入っていけるようにする。	絵本「ぼくはひとりで」
展開（30分）	めあて　ベトナムと日本はどうちがう？		
	2 絵本「ぼくはひとりで」を読んで、自分たちとの違いについて考える。	○少年は自分たちと同じくらいの年齢だということを伝えることで、身近な存在として考えられるようにする。	
	3 ベトナムの写真を見て考える。 ○バイクの3人乗り ○女性の先生 ○横断歩道で止まらない車 ○平日の朝から遊ぶ人たち	○日本とは違うベトナムの日常の写真を見せ、なぜそのような行動をしているのか理由を考えさせることで、そこには背景があることに気づかせる。	バイクに乗っている写真 病院の写真
	4 病院で寝転がっている写真を見て考える。 ○「自分だったら、どっちがいい？」という問いについて考える。	○これまでにベトナムについて学んできて、優しい人がいたことや素晴らしい文化があったことを想起させる。それによって、日本と違う行動をすることに何か背景があるということを想像させる。 ○病院で寝転がっている人たちは看病をしている家族であることを伝え、「自分だったら、どっちがいいか？」について考えさせる。どちらの立場であるかネームプレートを黒板に貼って表明することで、話合いを自分事としてとらえられるようにする。	
まとめ（8分）	5 今日の学習で、考えたことを話し合う。 6 学習の振り返りを書く。	○振り返りを書くことで、自分の本時の学びについて見つめ返し、考えを整理できるようにする。その中のいくつかを次時の道徳で紹介することで、考え方が広がるようにする。	

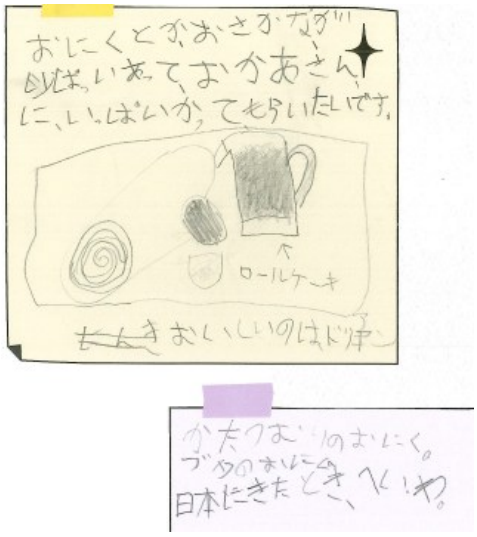
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） 日本とどのように違うのかを比べ、どちらの文化も認めることができるようにする。（ノートへの記述）
10. 学習方法および外部との連携 南小学校の校区内にあるベトナム物産店の店長、ホァさんと交流を行った。交流の内容は以下の通り。 ①ベトナム物産店を見学する。 ②ベトナムのことやお店のことについてホァさんに質問をする。 今回の交流で児童に感じさせたかったのは「ホァさんのやさしさ」であった。私自身がホァさんに話を伺う中で、その人柄がとても素敵だと感じた。いきなり訪問した私のことをとても温かく迎え入れてくださったからだ。今回の単元の中でも、このホァさんと児童を会わせるというのが一番大事なことになったと考える。ベトナムの人が全てこのような方だとは思わないが、こんな素敵な人がいるのだと児童に感じさせることができた。 また、フォーを作ったときに、保護者に協力をいただいた。火を使う学習が心配だったため、各班に１名程度の保護者が入ってくれたことはありがたかった。フォーを食べた後にはベトナムの食についての授業を行った。保護者の方も一緒に聞いてくださった。
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み 〇オンラインサロン「教え方の学校」の中での講話 〇学年懇談での講話 〇職員への講話

【自己評価】

12. 成果	〇家庭でベトナムの授業について話す児童が何人もいたようで、ご家庭から反響があった。また、ホァさんの店に行ってベトナムのものを購入するという家庭も多かった。国際理解の第一歩目である「その国について知る」ということや「その国に興味をもつ」という意味では、家庭も巻き込んで大変意義のある実践ができたと追われる。
13. 課題	●授業する相手が小学校２年生ということで、どこまで教えるべきか、ということに悩んだ。特に平和学習を行うかどうか直前まで迷ったが、行った。やはり、自分がベトナムで見てきた「枯葉剤の影響で苦しむ方々」について伝えたいと考えた。 ●ベトナムの方とつながってゲストティーチャーとして迎えたかったが、なかなか難しかった。JICA 宮崎デスクに掛け合うなど、考えられる方法をいくつかしたが、見つけることができなかった。
14. 改善点	〇指導対象学年によって、どこまで伝えて、何を考えさせるかを変更する。 〇パクチーなどの農作物を育てて、食べるという経験をしてみたい。 今年の熱以上にやることは難しいと思う。

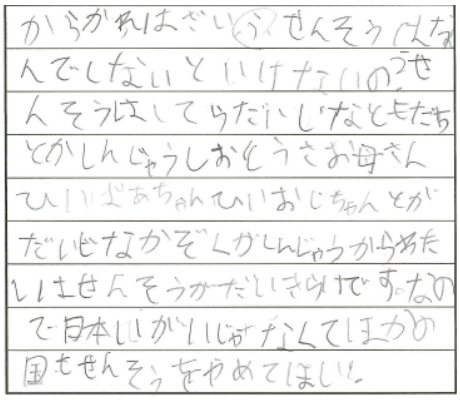
15. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

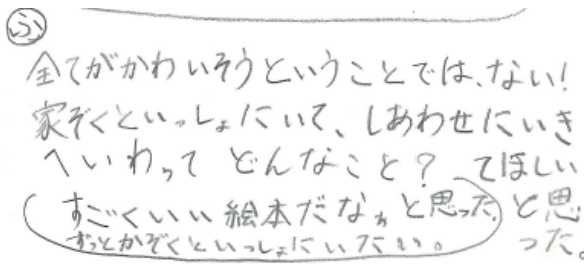




ホァさんのイラストを描いていて、ホァさんという人に興味をもったことが分かる。話しているだけで、人柄が伝わったと考えられる。

ホァさんへの質問の回答から、「日本は安全・平和」ということがメモされている。他国を理解してく中で、自国についての理解が深まった瞬間だった。



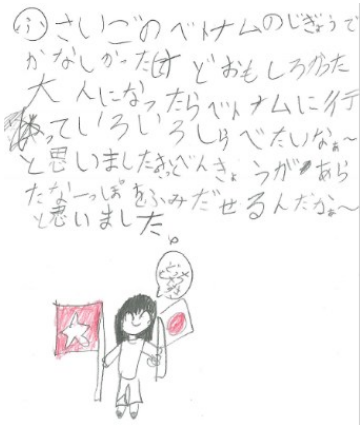


写真左

「日本以外の国でも戦争をやめてほしい。」ということが書かれており、戦争の悲惨さとともに、他国への関心も深まっていることが分かった。

写真右

「全てがかわいそうということではない！」とある。枯葉剤の影響で苦しむ方とお話したが、私自身が「かわいそう」という印象は受けず、むしろその方の笑顔が印象的だった。そのことを伝える授業でもあったため、このような感想が出てよかったと思う。

	 ③さいごのベトナムのじぎょうでかなしかったけどおもしろかった大人になったらベトナムに行ってしろいろしりべたいなぁ～と思いました。ぞんさぎょうがあらたなーっぽをふみだせるんだなぁ～と思いました。 ベトナムへの興味が深まっていることが伝わってくる。また、「勉強が新たな一歩をふみだせる。」ともある。これは私が普段から伝えたいことであり、私がベトナムに行った動機に他ならない。この子がどのようにしてこう考えたのかは分からないが、最後の授業の振り返りにこのような記述があり、自分が研修に行った意味があったように思えた。
16. 授業者による自由記述	教師海外研修の存在を知ったとき、「何が何でも参加したい！」と勢いだけで参加を決めた。ここには自分を成長させてくれるもの何かがあると信じて。そして迎えたベトナム研修での日々。自分が「これはどういうことだ？」と考えていると、自分よりも真剣に考える参加教員の皆が隣にいた。どの先生もみんな自分の立場から考えていた。そうして行う夜の振り返りの会は本当に密度の濃いものだった。「こんな経験は他ではできない。」心からそう思った。 帰国後、授業を作っていく中で「自分が伝えたいことは？」を何度も問いながら授業を作った。ベトナム研修で考えて終わり、ではなくて、そこから自分なりに授業に落とし込んでいく中でベトナムでの経験がブラッシュアップされていったように思う。また、ベトナム出身のホァさんという素敵な方との出会いも生まれ、「新たな一歩」を踏み出せたと感じた。 このような機会を作ってくださり、本当にありがとうございました。

参考資料：

・絵本「ぼくはひとりで」（2021 年・作/絵：フン・グエン/フイン・キム・リエン）

【実践者】

授業者氏名	岩川　奈稔子	学校名	鹿児島県立　大島高等学校
教科（科目）・領域	外国語（英語）	対象学年（人数）	1年1組（35名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2025年　10月　～　12月（　5時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：Let’s think about our lives through the Vietnamese’s lives!

2. 実践する教科・領域：外国語（英語）

3. 学習領域

	1	2	3	4
A多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
Bグローバル社会	相互依存	情報化		
C地球的課題	人権	環境	平和	開発
D未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：

・ベトナムに暮らす人々の生活文化や歴史を様々な視点から英語で考察し、価値観の多様性やその重要性を理解できる。

・ベトナムについて英語で学んだことを通して日本や奄美の生活文化や価値観を改めて見直し、英語で表現することができる。

・様々な形で外国人と協働する日本人について英語で学び、自らの職業観を高めることができる。

5. 単元の評価規準

①知識及び技能	ベトナムの生活文化や価値観、歴史に関する文章や説明を英語で理解することができる。
②思考力、判断力、表現力等	各国での歴史の取り扱い方の違いや，自分の地域の生活文化について英語で考察・表現することができる。
③学びに向かう力	生徒が主体的に生活文化や価値観の多様性と国際理解について追及し、ジブンゴトとして捉えようとしている。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】

他国の生活文化や歴史，価値観を学び自分たちと比較することで、理解力や尊重する気持ちを養成させたい。特に，本校がある奄美大島は九州以北と文化や自然で異なることも多く、むしろベトナムと共通している点もある。「国」という枠組みを超えてお互いを理解するきっかけを作りたい。また，英語を使ってベトナム戦争を題材として「誰が語るか」で歴史の見方が変わることを実感させたり、ベトナムで少数民族とともに行われているCommunity Based Tourismから学んだりすることによって自分の地域の良さを再確認する機会を設けたい。

【児童／生徒観】

習熟度クラスの生徒達であり，ほとんどの生徒が国公立大学を志望している。学習意欲が高く、好奇心旺盛な生徒が多い。授業でも意欲的な姿勢で取り組む生徒が多く見受けられる。海外や英語に対して興味や憧れがある生徒が多いが，それが漠然としたものである生徒も多く、特に東南アジア圏についての関心は比較的低い様子が事前に実施したアンケートで読み取れた。

【教材観】

・今回の教材は授業者が実際に撮影した写真や動画が多く取り入れられており、当時のエピソードの説明を付け加えることができるので生徒がより興味を持って理解を深めることができる。

・また、アメリカの教科書やベトナムのホアロー刑務所での資料など本物の資料を用いることで，より実践的な英語力を育成することができる。

【指導観】

指導にあたっては，生徒が「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」楽しさと「英語で表現する」楽しさを実感できるよう，知識の習得にとどまらず、ペアやグループでの実演活動を重視する。また、正確さよりも意欲的に発話する姿勢を評価し，安心して表現できる学習環境をつくる。これに並行して、国際交流や国際協働、異文化理解といった視点に基づいた姿勢を育むことを目指す。

7. 単元計画（全５時間）

時	ねらい	学習活動	資料など
1	What are the similarities and differences among Vietnam, Japan and Amami?	① KWLN チャートを記入。 ② Slido を使用してベトナムについての事前知識共有。 ③ JICA 九州教師海外研修の現地視察報告（ベトナムの文化や基礎知識） ・グループ対抗のクイズ大会形式 ・Differences なのか Similarities なのかも話合わせる	・KWLN チャート ・Slido ・ベトナムで撮影した写真や動画を使用したスライド
2	Let’s find the connection between Vietnam and Japan?	① Trio Discussion: “Should Japanese young people do volunteer work in other counties?” ② 教師海外研修の現地視察報告（JICA 活動；ダナン病院、日越大学、日本橋、空港、ニャンタム橋） ③ ODA の歴史（日本も受けてきて、ベトナムも与えている） ④ 教師海外研修の現地視察報告（日本語教育（中学校）の様子や日本語教師、ＶＴＶ）	・Trio ワークシート ・ベトナムで撮影した写真や動画を使用したスライド

3 本時	How is the Vietnam War described in different countries' documents?	① Trio Discussion: "Do you think it is important to learn history from multiple perspectives?" ② 教師海外研修の現地視察報告（ホアロー刑務所） ③ 日本の世界史の教科書でのベトナム戦争に関する記述確認 ④ ４人組のそれぞれのメンバーを以下の４点に分け、ジグソー法で学習（ワークシートを埋める）。 Ａ）ベトナムホアロー刑務所の記述 Ｂ）アメリカの教科書の記述 ⑤ ホームグループへ戻ってシェア ⑥ 比較・ディスカッション ・相違点と共通点 ・なぜ違う書き方になるのか？ ・どちらの視点がより強調されているか？	・ベトナムで撮影した写真や動画を使用したスライド ・詳説世界史（山川出版社） ・United States History and Geography（高校生用アメリカ歴史教科書） ・ホアロー刑務所で撮影した説明文の写真
4	Let's learn FROM Vietnam ① ～Community based tourism～	① Community based tourism とは何か ② Trio Discussion "Which do you think better, community based tourism or Mass tourism?" ③ FIDR の紹介 ④ 実際に経験した CBT の内容について授業者によるモデルプレゼンテーション ⑤ Mission の説明、グループ分け（各６名） 【Mission】 Let's make a presentation about community based tourism in Amami to our ALT! ⑥ プレゼンテーション準備	・ベトナムで撮影した写真や動画を使用したスライド ・両村についての FIDR 製作の動画 ・Landmark FIT English Communication Ⅰ(Lesson4)

5	Let’s learn FROM Vietnam② ～Community based tourism～	① プレゼンテーション発表 ・スライドと日程表を用意させて3分間のプレゼンテーションをALTに対して実施。 ・各発表に対してALTと英語による質疑応答 ・最後にベストプレゼンテーションを発表 ② まとめ（KWLN）	・Landmark FIT English Communication Ⅰ(Lesson4) ・１時間目に使用したKWLNチャート

8. 本時の展開（概略） 本時のねらい：How is the Vietnam War described in different countries’ documents?			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入１ （10分） 導入２ (5分) 展開１ （5分）	【Trio Discussion】 “Do you think it is important to learn history from multiple perspectives?” 【教師海外研修の現地視察報告（ホアロー刑務所）】 ・ホアロー刑務所の役割がフランス植民地時、ベトナム独立後、ベトナム戦争中で異なることを説明。 【今日のテーマの提示】 How is the Vietnam War described in different countries’ documents?	・テーマを示す。 ・3～4人組を作らせる。 ・時間管理（3分Discussion+3分Writing+3分自己添削）	・プロジェクター ・スクリーン ・Work Sheet ・School Timer ・生徒タブレット

展開 2 (15 分) 展開 3 (5 分) まとめ （10 分）	【活動①】 日本の世界史の教科書でのベトナム戦争に関する記述を生徒に確認させる。(日本語) 【活動②】 ジグソー法で学習させる。 A) ベトナムホアロー刑務所での記述 B) アメリカの教科書の記述 エキスパート班でそれぞれの英文を読解させる。 【活動③】 ホームグループへ戻って情報共有させる。 (According to the American textbook, the season for the war was… / The Vietnamese textbook says the war brought …) 【比較・ディスカッション】 ・「相違点と共通点」「なぜ違う書き方になるのか？」「どちらの視点がより強調されているか？」について各グループで検討させる。 ・話し合った内容を学級全体で共有する。	・4 人組を作り，それぞれの担当を決めさせる。 ・エキスパート班に移動させる。 ・歴史叙述の多様性と critical thinking の視点でまとめる。	・詳説世界史 （内容はスライドで示す） ・ワークシート ・United States History and Geography（高校生用アメリカ歴史教科書） ・ホアロー刑務所の説明文を撮影した画像を基にした英文プリント

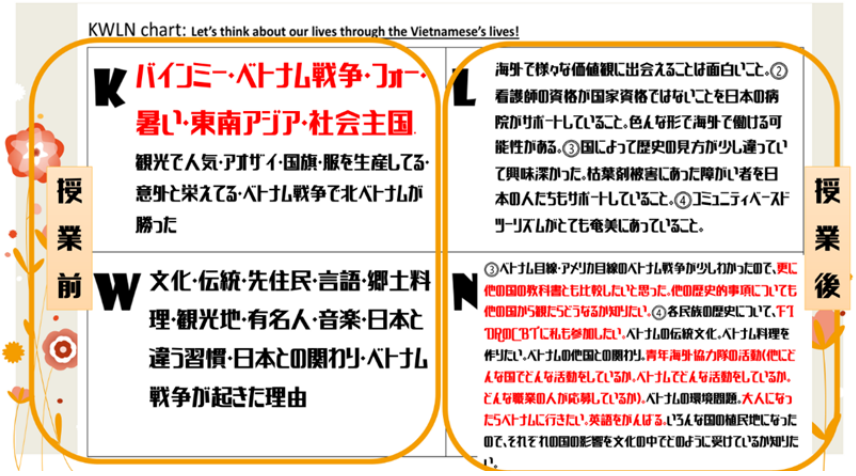
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）
・ベトナム戦争に関する文章や説明を英語で理解することができる。(知技)
・各国での歴史の取り扱い方の違いについて英語で考察・表現することができる。(思判表)
・主体的に表現比較について追及している。(態度)

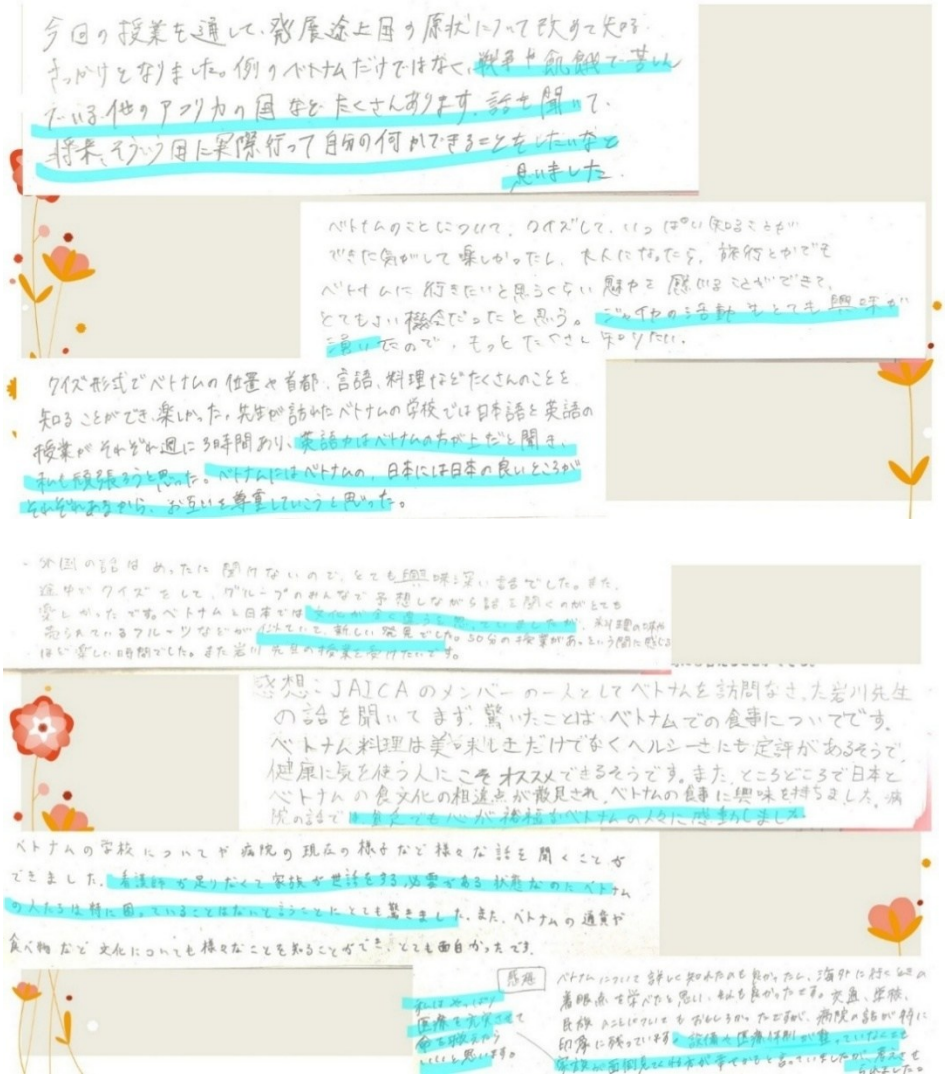
10. 学習方法および外部との連携
・5 時間目は ALT をゲストティーチャーとし、生徒のプレゼンテーションの目的を明確化させた。
・次項 11 の取り組みの中では JICA 海外協力隊 OB を招聘した。事前に対面で打ち合わせを行ったことで、生徒の実態に即した講演会をスムーズに実施できた。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み
・【校内】実践単元 1・2 時間目に相当する内容を 1 時間にまとめ、1・2 学年計 12 学級で実施。
・【校内】土曜ゼミナールによる開発教育講座「#国際交流 #JICA 海外協力隊協力隊 #日本語教育 #海外で働く」の実施（1～3 学年希望者約 50 名：90 分）
（内容）・教師海外研修報告（ベトナム）
・ドミニカ共和国で活動された JICA 海外協力隊経験者の講話
（JICA 海外協力隊、日本語教師）

・スペイン語講座 ・【校外】「海外に行った先生たちが世界のことを考えてみた。in 天文館図書館」 （主催：JICA デスク鹿児島） （内容）・教師海外研修報告（ベトナム） ・パネルディスカッション　※鹿児島初開催

【自己評価】

12. 成果	・世界への興味関心が高まり、英語力を高めることができた。 ・ALT と積極的にコミュニケーションをとることができた。 ・世界史と教科横断することで、多角的な考え方を養成することができた。 ・自分たちが住む奄美についても理解が深まり、生徒の地域への愛着が増した。 ・職員間でも興味関心が高まり、他学級、他学年の１２クラスでの授業を実施できた。
13. 課題	・英語の授業の中で本授業を実施した。そのことにより出た課題は以下の 2 点である。 ① 教材（アメリカの教科書）の単語が難しく、想定した時間よりも長い時間を読解に費やした。本物の教材を紹介しつつも、生徒の実態にあったレベルのハンドアウトを作成すること必要性を改めて実感した。 ② 導入で Trio discussion をすることが多かったが、英語でのディスカッションとなると、「話したいこと」「本音」よりも「話せること」「知っている単語」の方に重きを置いて生徒が話してしまう様子が散見された。「話したいことを話せるようになる」ためにさらなる英語力の向上を授業者も生徒も感じた。
14. 改善点	・CBT は本来「地域の人の声を聞いて」旅行プランを立てることが重要である。今回はちょうど直前に学年行事「地域づくりフィールドワーク」があったため、それに代えることができた。総合的な探究の時間との連携はあった方がよい。 ・Trio discussion はディスカッション後のライティング活動にもっと時間をかけたり、または宿題にしたりして、じっくりと自分の意見を書かせることも必要。
15. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	【KWLN チャートによる生徒の変化】授業前は限定的だったが、授業後、興味関心が深くなったり、また広がった。 

	【他学年他学級での授業の感想】  ・総合的な探究の時間における探究テーマが今までは地元のことを掘り下げるものばかりであったが、「地域に住む外国人労働者のための防災対策」「義務教育での英語教育の他国との比較」など自分との世界をつなげる「グローカル」な視点をもったテーマが担当学級の生徒から現れた。 ・2 月に JICA 鹿児島デスクが奄美大島で開催したイベントに多くの生徒が参加し、積極的に質問する様子が見られ、ベトナムだけでなく更に国際的な広い視野で興味関心を持つ生徒が増えつつあると感じる。
16. 授業者 による 自由記述	・日ごろから、新聞で見た記事やテレビで驚いたことなど生徒と共有することが多いので、今回の教師海外研修で授業者自身がベトナムで心を揺さぶられたり、生徒と共有したいと思ったりしたことを実際に叶えることができて率直に良かった、と感じている。特に、英語の授業の単元として「英語で国際理解教育」ができたことは自分にとっても自信につながった。 ・今回の授業では「一つの真実だとしても、見方を変えれば事実はたくさんある」ということ、「開発途上国から学ぶ」ということ、そして「本当の豊かさとは何か」というテーマでも生徒と話をすることができた。「他者を知ることは自分を知ること」という言葉もあるので、国際理解教育を通して、これから未来を切り拓く高校生たちがテストでは測れないこのような大切なテーマを今後も心に留めておいてほしいと願う。

	・授業実施にあたり、本校の管理職はじめ該当学級担任の先生、英語科の先生方、ALT に多大な協力をいただいた。また、NPO 九州海外協力協会や JICA デスク鹿児島、JICA 海外協力隊経験者であるアルカンタラさんにもサポートいただいた。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考資料：

・詳説世界史（山川出版社）

・United States History and Geography（高校生用アメリカ歴史教科書）

・ダークツーリズム～悲しみの記録をめぐる旅～（2018 年・井出明・幻冬舎）

・日本人の知らないベトナムの真実　（2024 年・川島博之・扶桑社）

・ルポ　技能実習生（2020 年・澤田晃宏・筑摩書房）

【実践者】

授業者氏名	松下　隼也	学校名	鹿児島市立　吉田北中学校
教科（科目）・領域	社会・地理分野	対象学年（人数）	2 年　1 組（11 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2026 年　10 月～11 月（5 時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：地理的分野　第3章　日本の諸地域　1節　九州地方

2. 実践する教科・領域：
中学校社会科・地理的分野

3. 学習領域

	1	2	3	4
A多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
Bグローバル社会	相互依存	情報化		
C地球的課題	人権	環境	平和	開発
D未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：
※本単元は、単元内自由進度学習で実施
単元を貫く学習課題：私たちのまちにとって「よい発展」とは
目標：自分たちの住む鹿児島（特に吉田地域）の現状を多角的に捉え、グローバルな視点とローカルな視点を結びつけながら、「よりよい発展」の在り方を探求する。

5. 単元の評価規準		
	①知識及び技能	・日本の諸地域とベトナムの特色や吉田地域の課題を理解し、資料から情報を適切に読み取っている。
	②思考力、判断力、表現力等	・日本の諸地域、ベトナムと日本（吉田地域）の共通点や差異、社会課題などに着目して、多角的・多面的に考察し、根拠を示して表現している。
	③学びに向かう力	・地域的課題について、よりよい社会の実現を視野に、自ら視点を変えて考えたり、他者と考えを比較したりしながら、主体的に追及、解決しようとしている。

6. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由あるいは単元の意義】

本校(吉田北中学校)の校区では、朝の出勤時間帯に多くのベトナム人(技能実習生)が歩いて職場に出勤する風景が「当たり前」のように見られる。地域の方々や生徒たちにとってもいつもの日常である。しかし、私自身は、赴任して以来この風景は「当たり前」には感じていなかった。どこか、20 代前半で都会の神奈川で見た、始発の駅に向かう際にすれ違った夜勤明けの多くの外国人をみたときの記憶と重なった。日本は誰もが知るように、人口減少と少子高齢化が顕著に進み、社会課題となっている。これら社会課題に対して、「外国人との関わりや向き合い方」が本質的なテーマにあがると考える。本単元では、単元を貫く学習課題として、「私たちのまちにとって「よい発展」とは」というテーマを設定した。以前から、本校の校区内に住むベトナム人(技能実習生)の存在やベトナム研修で見たベトナムの発展(都市部と山岳少数民族の発展のちがい)、山岳少数民族の

人口減少と過疎化の共通点などを参考に、「過疎化の進む私たちのまちの発展」や「これからの日本のグローカルな未来」について、生徒たちとともに、探求していきたいと考える。本授業をきっかけに、「グローバリズム」と「ナショナリズム」の二極化する時代で、相互に承認（自由の相互承認）できる生徒を育成する糸口になれることを期待している。

【児童／生徒観】

本学級の生徒は、全体的に社会科の授業に意欲的に取り組んでいる。教師の発問に積極的に応じ、ペアやグループでの意見交換や共同的な活動を協力してより良い考えを導き出そうとする姿勢が見られる。アンケートの結果では「地理と歴史ではどちらが得意か？」という質問に対し、約6割の生徒が「歴史」と答えるなどどちらかと言えば、歴史的分野への興味・関心が高い生徒が多いことが分かった。また「ベトナムについて何を知っているか？」という質問に対しては、ほとんどの生徒が「あまり知らない。」と回答し、「赤と黄色の国旗」や「フォーを知っている。」など、ベトナムという国への関心や身近さは低い。本授業では、地域に多く住むベトナム人の技能実習生を取り扱うため、ここからベトナム人やベトナムの文化、また海外への関心を高めていきたい。

【教材観】

本単元においては、「社会課題」「グローバルな視点」「ローカルな視点」「探求活動」「ディスカッション」などを学習活動のテーマとしている。社会科の授業としては、多くのデータ、現地での写真や動画などの資料が大切な存在となる。ベトナム研修で実際に見てきたものや、現地の人々が語った言葉、思い、そんなリアルを教材として活用することで、生徒に深い学びを展開させることができると考える。例えば、東南アジア諸国における、特に発展目覚ましい新興国「ベトナム」のリアルを感じる都市部のビル群。はたまた、近年までSociety2.0－農耕社会－の生活の中で山岳少数民族の見せる幸せという笑顔と携帯電話でSNSを楽しむ少女が見せるジャンプフロッグ。吉田地域の人口減少と外国人の人口の増加というデータ。生徒たちにはそんな「リアル」の詰まった生きた教材を存分に楽しんで活用してもらいたいと思う。その上で、「私たちのまちにとって「よい発展」とは」というリアルな社会課題について、真剣に考え、議論して、「ジブンゴトとした学び」を深めたい。

【指導観】

指導に当たっては、「単元内自由進度学習」を実践している。生徒はそれぞれの進度でガイダンスプリントを参考に、ペア学習にて「学習課題（教師からのミッション）」「必須用語」「ノートでの確認」などロイロノートの共有ノートを活用しながら主体的に学習を進める。学習においては、教科書や地図帳、写真、タブレットの検索エンジンなどを活用しながら、資料を十分に読み取らせてそれぞれの諸地域の地理的な特色を理解させたい。「単元内自由進度学習」では、生徒が主体性をもって学習を進める中で、資料を活用する能力と自己調整力の向上を図りたい。本単元では、日本の国土の諸地域の特色を大観させるとともに、地域の区分や各種

	の主題図・資料を踏まえて、地域を区分する技能を身に着けさせたいと考える。私たちの住む「九州地方」を題材として、身近なものや「その他の地方」との比較を通じた学習で、「私たちの住むまち」を単元テーマの中心に据えることによりジブンゴトとして捉えた視点と客観的な視点を大切にしたい。その上で未来を担う子どもたちに、私たちの住む日本や郷土の生活、未来への課題を探求し、課題解決力の学習体験を通して、「生きる力」や「未来を切り拓く力」の育成を図りたい。

7. 単元計画（全　５時間）

時	ねらい	学習活動	資料など
1	①予見の時間（単元の見通しと単元目標の共有） ②「私たちの住むまち(鹿児島・吉田地域)は、どんな状況にあるか？」	○「ベトナムの発展（都市部と山岳少数民族のそれぞれの視点から)」	住む町の課題資料 視点を見せる資料
2	「ベトナムの発展（都市部と山岳少数民族のそれぞれの視点から)」	○ベトナムで見た、ベトナムの発展（都市部と山岳少数民族のそれぞれの視点から）について写真や動画、データなどの資料を見せる。 ○それぞれの「発展」があることを考えさせる。 (物理的な発展と精神的な発展など)	ベトナム研修での写真・動画
3 本時 単元内自由進度学習	「私たちのまちとベトナムのつながり」	○吉田地域で働くベトナム人について考える。 ○日本における外国人技能実習生の推移や吉田地域の人口推移を考えさせる。 ○日本や吉田地域の過疎化とベトナム人技能実習生の存在がどのように関連しているのか考えさせる。	使用する資料 自治体公表資料（外国人人口の推移など）
4	「私たちのまちにとって『よりよい発展』とは何か」	○ベトナムと吉田地域の事例から、「よりよい発展」とは何かを考えさせる。 (人々の暮らし、経済、環境の３つの視点)	
5	「未来の吉田（私たちのまち）を考え、議論する」	○「私たちのまちがこれから歩む道は、どんなものだろうか？」についてディスカッションさせる。 ⇒哲学対話形式で実施	

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：地域に住むベトナム人から、吉田の未来を考える。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	○指導上の留意点（支援） ◎評価	資料（教材）
導入 （5 分）	1 ベトナムのクイズをする。 ・ベトナムの朝の写真 ・吉田の朝の通勤する	○写真や数字を提示し、データと場所について意識させ、学習に興味をもたせるようにする。	・写真 ・人口推移のデータ

	ベトナム人		
展開 （15 分）	2 単元の学習課題を確認		
（単元探求テーマ）「九州地方と鹿児島はもっと発展したほうがいいのだろうか？」			
展開 （30 分）	**〈授業前半〉（自由進度学習）（ペア）** 3「ガイダンスプリント」に沿って、それぞれペアごとに、自由進度学習を進める。 【活動内容】 ・必須用語のチェック ・先生からのミッション ・各主題の学習課題のまとめ	○ガイダンスプリントを参考に、学習の流れや進捗状況を確認させる。 ○重要な必須用語を確認させる。 ○共有ノートでの、他のペアの活動の参照。 ○計画的に学習が進められるように、時間の掲示をする。	・タブレット ・ガイダンスプリント ・教科書
	4「ガイダンスプリント」での、進捗状況の確認と教師への提出をする。 **〈授業後半〉（探求学習）**	○ガイダンスプリントを参考に、進捗状況を確認させ、今後の学習計画を意識させる。	
探求テーマ：なぜ私たちの住むまちには、ベトナム人がたくさん住んでいるのだろうか？			
	5 探求テーマについてのアンケートに回答し、理由を発表する。 （予想される回答） ・仕事・旅行・出稼ぎなど	○アンケートの結果を掲示する。 ○グループで探求テーマについて、シンキングツールを活用し、話し合いを深めさせる。	
まとめ （5 分）	6 写真やデータを見て、探求テーマについて、まとめる。	◎探求テーマを解決するための視点を考え、ペア・グループで共有することができる。	
	（主な資料） ・吉田地域の朝の通勤するベトナム人 ・人口推移のデータ （この数字は何の意味？） ・加治木産業の方からのインタビュー動画や資料（外国人技能実習生について）		
	7 グループで探求テーマについて話し合い、まとめたことを	◎資料を根拠に多面的・多角的に考察、構想し自分の考えを表現することができる。	

	発表する。 8 まとめ（リフレクション）本時の学習内容や活動について、「振り返りシート」に記入する。	○「できたこと」「解決したこと」「もっと知りたいこと」に合わせて、振り返りをさせる。	

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） ・ロイロノート（生徒の作成したシート） ・スプレッドシート（自己評価）など
10. 学習方法および外部との連携 ・鹿児島市役所　吉田地域の人口推移データ　（吉田支所より提供） ・地域のベトナム人（外国人技能実習生）について　（加治木産業のご協力）
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み ・令和８年度九州中学校社会科協議会鹿児島大会で実践予定 ・帰国後報告会実施予定…2026 年 1 月 25 日(日)（JICA 鹿児島デスク　協力）

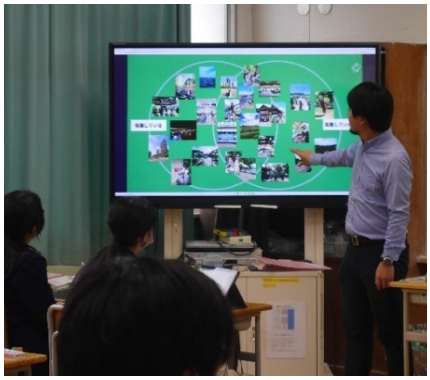
【自己評価】

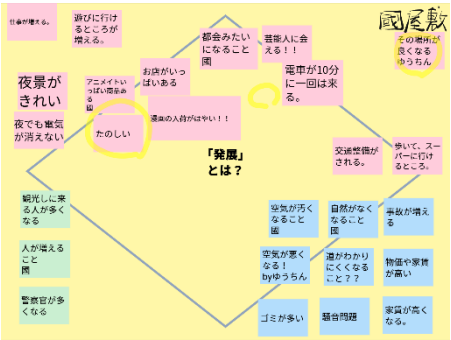
12. 成果	・生徒たちにとっても、教師の私にとっても、地域(校区の歴史や人口推移、地理的な要因など)に注目し、様々なことを知るきっかけになったと感じる。 ・「地域に住むベトナム人」というキーワードを授業に取り入れたことにより、身近に存在する外国人から世界に目を向けることができ、より「グローカル」な社会科の授業を展開することができた。 ・外国人技能実習生について詳しく調べたり考えたりすることができた。 ・地域の企業(外国人を雇用する加治木産業)とのつながりをもつことができ、学校外の社会とのつながりを学習に活用することができた。 ・「私たちの地域のよい発展とは？」というテーマを単元を通して探求することにより、より地域の一員であることや地域の未来についてより具体的に考える生徒たちの姿が見られた。
13. 課題	・地域の外国人といっても、ベトナム人以外の方もいる可能性がある。 ・自由進度学習での実践のため、引き続き知識とのバランスを考えて授業設計していく必要がある。 ・授業実践を今後どう活かしていくのか？ベトナム人と生徒たちの関わりはどのように展開していくのか。
14. 改善点	・もっと加治木産業や市役所(吉田支所)に情報を収集する(さらにインタビュー実施など) ・自由進度学習の学習内容(単元)の精選を行う。 ・生徒たちの加治木産業への見学・インタビューや働くベトナム人の方にインタビューするなどの活動を増やしていきたい。

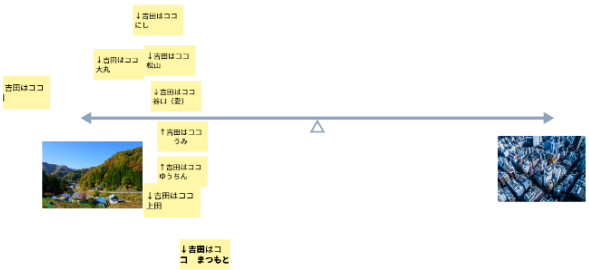
15.　学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

〈授業の様子〉

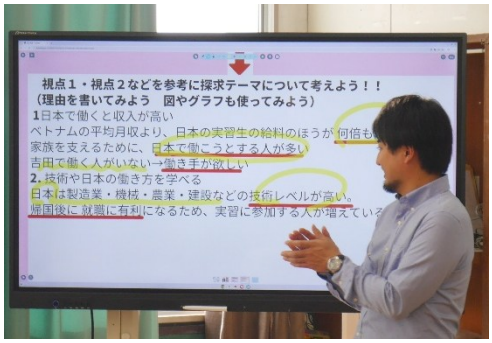
ベトナムの写真から「発展とは」を考える活動

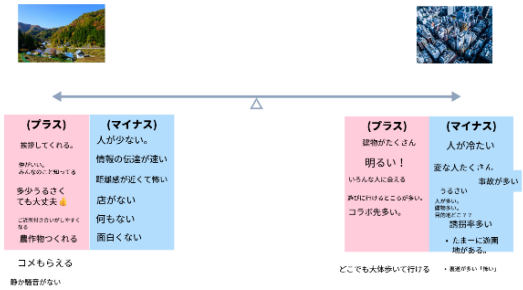


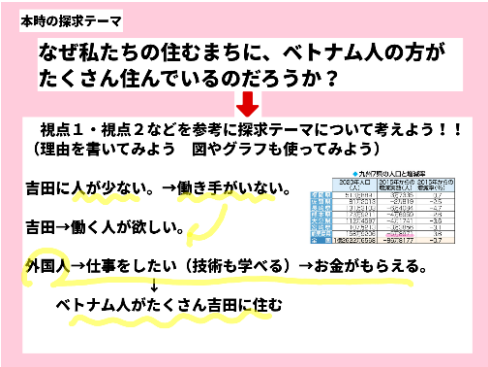


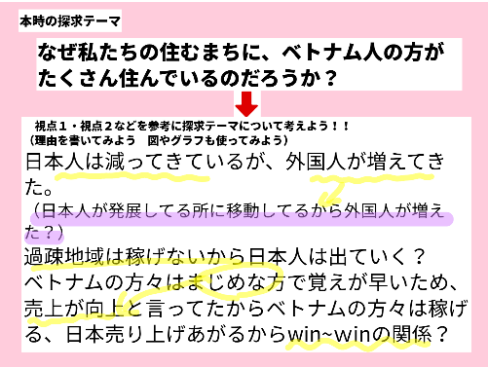


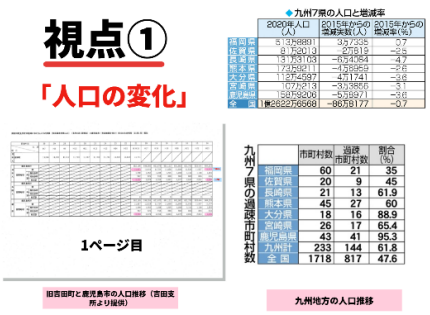
探求テーマについて話し合う

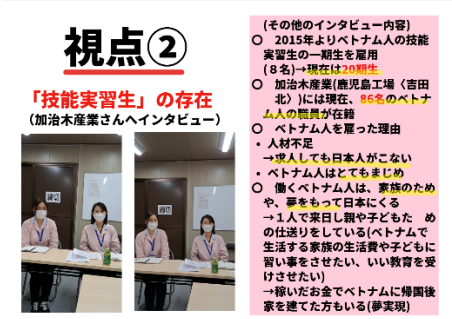


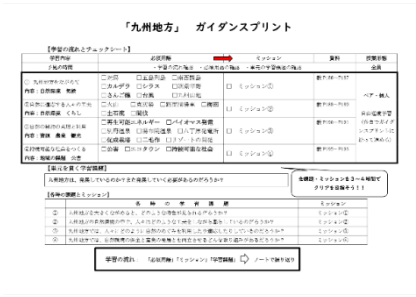






<table>
<tr>
<td></td>
<td>
探求テーマ(2つの視点)




自由進度学習について


ガイダンスプリント

ロイロノート(共有ノート)を活用
</td>
</tr>
<tr>
<td>16. 授業者による自由記述</td>
<td>本校に赴任してから、ずっとしてみたかった授業が実践できたことに喜びがあふれる。毎朝学校に出勤とともに、すれ違う外国人の存在。地域では当たり前の風景に同化していたが、私にとっては違和感しかなかった。「この外国人たちはどこからきているのか？」「なぜこの土地に働きにきているのだろうか？」「どんな職場で働いているのだろうか？」問いが広がっていた。そして、この問いを「生徒たちとともに考えてみたい」というのが一つの目標になっていた。そして今回、社会科教師として念願の授業実践を行うことになった。地域で多くすれ違う外国人のそのほとんどが「ベトナム人」だったということ。そして今回の「ベトナムでの教師海外研修」というタイミング。運命だとも感じた。この研修をきっかけに、地域のベトナム人の方々が務める企業(加治木産業)へのインタビューや、そこで働くベトナム人の存在。実際に教師海外研修で訪れたベトナムの地で、目で見て肌で感じた経験や生きた教材の数々。本授業を実践して、生徒たちの地域に対する視点や、そこに住む外国人の存在に少しでも意識が高まったと実感している。ナショナリズムとグローバリズムが相対する今日この頃。生徒たちに地域からこの問題を、他人ごとではなくジブンゴトとして考えるきっかけづくりになったのではと思う。今回の教師海外研修でもたくさんの出逢いがあった。これからも生徒たちに出逢いで未来を広げていけるような授業を実践していきたいと考える。未来を切り拓く子どもたちの未来づくりのきっかけを。</td>
</tr>
</table>

参考資料：

・吉田地域の人口推移データ　(鹿児島市吉田支所)

◆研修を振り返っての感想

福岡市立福岡きぼう中学校　　明石 浩司

ベトナムでの研修は、私にとって「人と人との出会いの研修」でした。ムオン族やカヨン族の方々との交流では、ドラの音による歓迎や伝統舞踊、民芸品づくりを体験し、人々が互いに支え合いながら暮らす姿に深い感銘を受けました。サトウキビ畑や高床式の家での食事など、自然とともにある暮らしも強く印象に残っています。ハノイの圧倒的な活気やダナンの美しい海、さらに JICA を通して築かれた両国の信頼関係や強いつながりも実感しました。観光と地域文化を両立させる取り組みや国際協力の現場に触れ、持続可能な社会づくりの大切さを学びました。今後はこれらの学びを社会科や総合的な学習に生かし、生徒とともに主体的に問い続ける授業を実践していきたいと考えています。

学校法人筑陽学園　筑陽学園中学・高等学校　　林 愛恵

「国際社会をジブンゴトとして考え、行動できる力を生徒に身に付けさせたい。」という思いを、本研修は授業や活動として具体化するきっかけを与えてくれた。ベトナム研修を通じて、当事者と対話し、その考え方や生き方に触れることが「ジブンゴト化」につながると実感した為、研修後は「人」との触れ合いを軸に実践を行った。「国際社会や異文化理解に関心をもつ大学生は、より早い段階でのきっかけを得ている。」という学び合いネットワーク研修での言葉が印象に残っている。子どもたちに対する同教育の意義を噛みしめ、今後も自分の軸を大切に、実践を重ねていきたい。最後に多くの学びを与えてくださった JICA 関係者、参加教員の皆さまに心より感謝申し上げる。

佐賀大学教育学部附属小学校　　小林 佳愛

「子どもたちに外国語を学ぶ意味を伝えたい！」

AI 翻訳が当たり前に使われる時代。自分の中で明確な言語化ができていなくても、AI が代わりに言葉をつないでくれることに慣れてしまった時代。そうした今だからこそ、子どもたちに自分の言葉で表現することの大切さを伝えたくて、研修に参加しました。

「愛着のある日本語」とは、現地で活躍する津野隊員が教えてくださった言葉です。伝えたいことを言葉にするのは時間がかかるけれど、言葉に思いを乗せるとはこういうことなのだ、と実感しました。

授業では、日本とベトナムの町の様子の違いから、人々の考え方の違いに迫る学習を行いました。遠く離れた国で起こっていることは、日本の課題でもあります。

今回の研修は、国際理解教育を学ぶ大きなきっかけとなりました。支えてくださったスタッフの皆様、本当にありがとうございました。 Xin cảm ơn！

長崎県立島原特別支援学校　　小川 光洋

「調べてみたら見方が変わる。」

教師海外研修で学んだことを生徒たちに授業する過程で、生徒が発した言葉です。私自身も今回の研修を経て、見方が大きく変わりました。

出会ったベトナムの人々の「明るさ」「大らかさ」「未来志向」「家族」「先祖」「地域」「国」を愛し誇りをもつ姿に、私も「そうでありたい」と強く感じさせられました。

今回の研修は、教員として、一人の人間として、残された時間をどう使うか考える機会となり、次なる一歩を踏み出すきっかけとなりました。

今回の研修でご縁をいただいた多くの方々に感謝するとともに、これからもよろしくお願いいたします。

熊本県立熊本農業高等学校　　鳥江 太介

最初は「よくわからない国」だったベトナムが、街の風景まで思い浮かぶ身近で大切な国となりました。知らない人たちと１週間の海外研修に参加することに大きな不安がありましたが、好奇心から踏み出した１年間は想像以上に充実した時間でした。宿題の多さに苦労しながらも、新たな気づきを重ねる中で価値観が更新され、今回の経験があったからこそ実現できた授業にも取り組むことができました。個性的で素敵な参加教員の皆さん先生方、引率の橋口さん・宮原さん、そしてベトナムでの出会いは大きな財産です。生徒たちは海外を身近に感じるようになり、我が家ではフォーが定番料理になりました。このご縁を大切に、これからもつながりを広げながら、国際理解の学びをつないでいきたいです。

宮崎県小林市立南小学校　　長﨑 雄史

大事なのは「人」。

ベトナムを訪れて、子ども達に一番伝えたかったのは、「ベトナムでの人との出会い」だった。自分たちに献身的に尽くしてくださる「人」が、確かにベトナムにもいることを何とか伝えたい。そう考えていた折、小林市内でベトナム出身のホァさんという素敵な方と出会い、その思いを子どもたちにも伝えることができた。

また、共に研修に参加した参加教員の存在も大きかった。すばらしい方々と学べたからこそ、研修は充実したものになった。最終報告会に参加した本校職員は、そんな彼らの本気の姿勢に触発されたようだった。それぞれの参加教員がこれからどのように教育活動に取り組むのか、とても楽しみ。

「人」によって心が大きく動いた研修だった。

鹿児島県鹿児島市立吉田北中学校　　松下 隼也

私の好きな言葉があります。「知行合一」という言葉です。
中学校社会科教師として、「ODA」や「社会主義国」、「新興国の発展」など、生徒に教授するために、実体験をもって知識と言葉を得たいということが本研修への参加の理由の一つでした。ベトナム研修での日々は、多くの出逢いがありました。文化や価値観、歴史認識、ベトナム人やベトナムのために働く日本人、そして、本研修の参加教員。この出逢い一つ一つが私にとっての人生の知見と財産になっています。ホアロー収容所や山岳少数民族・公立中学校への訪問など貴重な時間が、「発展するとは？」「幸せって？」「なぜ日本にはあってベトナムには無いのか？（概念のない不登校や見かけないホームレス）」などたくさんの問いを与えてくれました。そんな問いたちをこれからも私自身、また子どもたちとともに探究していきたいと思います。この教師海外研修を通して、さまざまな気づきや学び、新たな問いとの出逢いもあり、人生にとってもかけがえのない研修とさせていただきました。JICA 九州をはじめ、NPO 九州海外協力協会、本研修に関わったくださった方々に感謝しております。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

鹿児島県立大島高等学校　　岩川 奈稔子

教師海外研修を通して経験したことは、生徒に還元したくなることばかりでした。素晴らしい人との出会いに恵まれました。各訪問地で出会ったベトナムの方も日本人も価値観を揺さぶられるような、多くのことを教えてくださいました。

全てのクラスで話したのは「幸せ」について考える機会となったダナン病院でのエピソードです。高度な医療技術の中で孤独に入院する日本の病院と、足りないものは多いがそれを家族や周囲の人が補い、人に囲まれながら過ごすベトナムの病院。果たして幸せなのはどちらか。日頃は授業を担当しておらず、生徒との関係もまだできていない、初めて訪問したある学級でもこの話をしました。授業後、一人の看護師志望の生徒が話しかけてくれました。

「先生、奄美に医療技術と家族、どちらも両立できる病院を作るね。」

未来はきっと明るい。生徒の決心にそう信じることができました。

ベトナムのことをずっと「カオスだカオスだ」と言っていた私たちでしたが、振り返れば私たちメンバーもなかなかのカオスだったと思います。教育に対するパッションは共通しているけれど、校種も教科も年代も性別もばらばら。愉快で、発想が自由で、実にカオスなメンバーでした。だからこそ、それぞれの立場からの意見を聞き、学ぶことがとても多かったのです。毎夜繰り広げられた濃密なディスカッションは忘れられません。このメンバーで本当に良かったです。ありがとうございました。

開発教育は間違いなく私のライフワークになりました。これからもオモイを込めてがんばります。

2025 年度（令和 7 年度）
JICA 九州 教師海外研修 報告書
発行 2026 年 3 月

【発行者】
独立行政法人国際協力機構 九州センター（JICA 九州）
〒805-8505 福岡県北九州市八幡区平野 2-2-1
TEL 093-671-6311

【事業受託者】
特定非営利活動法人 九州海外協力協会
〒812-0025 福岡市博多区店屋町 4-8 蝶和ビル 503
TEL 092-710-5310 / FAX 092-710-5304